

文 學 部
研 究 年 報

71

2024年度

The Annual Collection
of
Essays and Studies
Faculty of Letters

學 習 院 大 學
GAKUSHUIN UNIVERSITY

令和七(二〇二五)年三月一〇日 印刷発行 ©

文 學 部 研 究 年 報 第 71 輯

編 纂 兼 發 行 人 學 習 院 大 學 文 學 部
代 表 著 眞 野 泰

〒121-0293 東京都新宿区北町四番地

印 刷 株 式 会 社 理 想 社

〒121-0266 東京都豊島区目黒一丁目

発 行 所 學 習 院 大 學 文 學 部

ISSN 0433-1117

まま全文引用しておくことにする。

5 モンスーン地帯と敬語（まとめ）

モンスーン（季節風）という語はアラビア語の「マウスィム」（mausim）「季節」から出たという。インド洋および南アジアで夏季には南西から、冬季には北東から吹く風のことをいう。日本に初めて西欧文化を伝えてきたポルトガルやスペインの船も御朱印船もみなこのモンスーンに乗って往来していた。同時にこの風は夏場日本に雨と暑さをもたらすので、ここに湿気に包まれた思考法がもしもされた。和辻哲郎の風土的分類によれば、モンスーン地帯では受容従型の人間構造が形成されたという。

世界の敬語について、おおざっぱにまとめれば、ユーラシア大陸の西方一帯は敬称として2人称もしくは3人称の複数形が使用されている。そして、アジアのモンスーン地帯すなわち受容従型の風土に敬語が発達していると言えよう。この場合、インド・シナ諸語とインドネシア諸語などの南方語群では語彙的な敬語が多様化しているのに対し、日本語や朝鮮語のような北方語群では形態的に敬語が組織化されているという特徴が見られる。——小泉保（1984）「8 外国語の敬語」『敬語法編（研究資料日本文法 第9巻）』明治書院（鈴木一彦・林巨樹編）pp. (18) - (19)。

短い記述で、しかも他での言及を現在見出せないゆえ、世界の「敬語」法の類型的解釈からこの「モンスーン」地帯への着想まで如何にたどり着いたのか、その詳細は未詳である。上記部分からのみうかがい知れるのは、それが、敬語法による類型的地域的データの積み重ね、という帰納的方法によるものと見るよりは、その和辻哲学の引用からも推してはかれるように、例えば、気候学がご専門でそれを基盤とした地理学による文明論をも展開した鈴木秀夫氏の思考法、その一例としては『森林の思考・砂漠の思考』（1978、NHK 出版社）にも相通うような、極めて演繹的な洞察であったのであろう、と思われるということである。

日本語の河川名（水名）の重層的形成 とモンスーン・アジア最古基層 ——大野晋氏のインドへの視線の先にあるもの——

安部清哉

0 はじめに——小泉保（1984）「モンスーン地帯すなわち受容 従型の風土に敬語が発達している」

日本語の歴史的な背景として、気候学上「モンスーン・アジア」と呼ばれる地域に広がる言語的背景があると考え、安部（2001.8）の韓国での口頭発表を最初としてそれ以降のいくつかの拙論にて、基層としても取り上げてきた。また、それに関連することがらを発表してきた（安部（2003）が比較的わかりやすい）。

日本の言語の研究で、その安部（2001.8）よりも先に、日本語のある一特徴を説明するのにこの「モンスーン」ということばを使い、その特徴の背景に、気候特徴の「モンスーン地帯」という特定地域があることを洞察した研究者がもう一人いることを、その後見出した。ウラル語学がご専門の言語学者・小泉保博士である。拙論の約15年ほど前の1984年のことになる。

その言及は、次のようにごく短いものである。氏のご研究の中にはいまだこれ以上の言及を見つけだせない。おそらくこれがそのすべてであろう。記述の前半部分は直接は関わりないが、その洞察の演繹的発想が拠ってきたる源をうかがいしることができる部分であるので、少し長くはなるが、その御担当部分中の一冊最後の章として置かれた短い1節をその

小泉保氏は、本稿執筆者とは専門が異なるものの、院生時代に読んだ『日本語の正書法』（大修館書店、日本語叢書、1978.5）、次いで、研究領域的には徐々に一部が重なってくることによる『縄文語の発見』（青土社、1998.6）などから学ばせていただいた者としては、この日本で、先学の大家のお一人が、15年以上も先に目を向けられていた**モンスーン**という同じ地域の問題に、はからずもたどり着けていたことをこの記述に見出せたその日は、言語研究に進んだ一学徒としては、なんとも言えない幸福感をひさしぶりに研究の上で感じることでできた瞬間でもあった。「モンスーン・アジア」という地域名を日本語の背景として言及している研究者はいまだ他に見出せていない。それゆえ、「モンスーン・アジア日本語史」の研究史としては、小泉保氏の後の安部の指摘ということになる。

本稿では、安部（2001.8）以降のその「モンスーン・アジア言語文化圏」におけるいくつかの現象と問題について、その後収集した地図を補いつつ報告しておきたいと思う。

1 はじめに——「モンスーン・アジア言語文化圏」の仮説

日本語の歴史でも、上代（奈良時代）を遡る歴史については、未解明の部分が多い。いわゆる日本語の系統は現時点でも未詳であり、日本語が属する語族は未詳である。日本語の言語系統というだけでなく、日本語の古代以前（飛鳥・奈良時代以前）における形成過程も、いくつかの概観的仮説は提示されているものの（たとえば、南方言語と北方言語の重層と混成など）、ほぼ未詳、あるいは定説がない、というに等しい状況である。

日本語の所属語族が未詳である、という点ではアイヌ語、隣国の朝鮮語（韓国語を含む）も同じである【注1】。それはつまり、東アジア大陸の東端部、さらに東側の縁にあたる、半島部、列島部、島嶼部というはば連続している一定範囲という、ユーラシア大陸東端の周縁部の言語の歴史を解明することが、なかなか容易ではない、ということを示している。その

位置的共通性から見ても、文献資料のほかの資料の不足とは別に、近年では、このようなはば連続する地理的地域的に共通している事情も不明の要因として指摘されるようになってきている。

さて、そのような日本語の歴史的背景を探ってみると、従来考えられてきたよりも、その「基層」として想定すべき範囲が思いのほか広大なのではないか、と考えられた（安部（2003））。ひとまず具体的にその1例を示してみると、【図1】にあげ「類別詞」（名詞類別詞）の範囲がそれである。その地理的範囲にほぼ類似ないし一致しているのが「モンスーン・アジア」という気候学上の領域である（後に詳述）。

この原因を見てその特徴的偏在に気づき、地図を太平洋側が中心になるように組み換えたのが【図1】である。このように組み替えてみると、太平洋を取り囲むようにして一定の領域を形成しているかのように見えることがわかる（補助線や点線は安部による）。その領域は単なる偶然に出来た範囲というよりも、何か特定の要因と関わっていることを示唆しているように見えた。なぜ、この言語事象は、このような「一定の領域」を形成し得てきたのだろうか？

安部のそれまでの日本語方言研究における方言境界線群の偏在の現象から類推して、たまたまこの「類別詞」というひとつの現象が偶然にこのような領域を占めているというよりも、他にも同一範囲に何らかの言語・文化を含む文化人類学的現象を共有しているように見えたのである。それは、結果としては、後述する「モンスーン・アジア」という文化的領域と重なる特定の意味を持っていると解釈でき、いわば特殊な領域と判断できるものであった。

言語特徴のひとつである「類別詞」が「モンスーン・アジア」の領域とほぼ重複している理由、要因は、この二つだけでは直ちには説明し得ない。しかし、この同じ領域に同じように見られる、「神話」「特定の主食植物（である特に芋類）」、それら「神話」と「植物」の2つの間にある相関関係（「ハイスウェレ神話」他）、河川名ほかの基本的言語現象の分布、動

物・植物の分布範囲、モンゴロイドの移動ルート・拡散範囲、などが重複していることを認める時、この領域が、いわゆる「モンスーン・アジア言語文化圏」【図3】として名付け得るような、一定の特徵的領域を形成していることを見出すことができる。拙論において、言語のほか文化人類学的諸現象にわたる微細な種々の関連現象を提示して言及してきた由縁である。

しかしながら、仮説検証的な対象として「モンスーン・アジア言語文化圏」を仮設するのまでは研究方法としては良いだろうが、内部にいくつもの既知・既定の特徵的地域を複数内包し（例えば、言語で言えばオーストロアジア語族の領域ほか）、かつ、想定期間においても長期間を想定する必要があるような範囲——例えば、オーストロネシア語族は過去5,000～6,000年間、日本の縄文時代は約12,000年間であるから、それらを十分包含し得る期間となる——となると、この対象領域への取り組み方、考え方も、既定の思考法に縛られないような柔軟な発想法でアプローチする必要性を強く感じる。また、「基層『語』」として多くの共通の特徵を均質に古くから持っていたかどうかという問題はひとまず保留し、まずは様々なデータを収集して見ていくしかないと考えられた。ほとんど未知の領域でもあるのだから。

本稿執筆者は、この領域を、日本語の「最古基底層」と設定し得ようかという仮説的見方に立っているのではあるが、想定範囲をかなり古くまで遡求せざるを得ない故に、特に言語の問題に限ってみても、簡単な問題ではなさそうである。例えば、いわゆる従来からの「言語層」(strata)と呼び得るような複数の一定の言語的特徴を（例えば「語族」を規定するようにな）、この領域において質・量ともに十分に数え上げ列記できるようなものが、年代的長さとか言っても、資料的に十分に揃い得るのかどうか、という問題もある。「最古層」に遡り、そこにたどり着く前の段階において、この領域に既に分布が明らかになっている多くの語族、語派、言語分布をどう考えていくか。それらのいわば新しい側の言語の分布層をどのよ

うにして一枚、一枚剥ぎ取りながら、どこまで過去に遡り得るかは、試行錯誤しながら、その適否を検討してやってみなければわからない部分が多いことになる。

そこで（あるいは、その意味で）、「最古層」「言語層」という場合の言語分布の「層」のとらえ方を、次のように少し拡大解釈させて、本論では緩く考えながら、解釈と論を進めていくこととしたい。

2 層位論的言語地理学からみた日本語の重層的形成——分布層の重層という視点

日本語の歴史的形成過程を、系統論にも関わる古い年代までも含めて考えとするとすれば、日本語方言の分布状況とその形成過程とを視野に入れないとおかなくてはならないのは、1900年代までは別として、今では研究上の基礎的情報のひとつとなり、いわば常識となったと言えるよう。

現在の日本語を、例えばごく単純化させてとらえるならば、およそ明治以後の近代以降、さらに狭めて言えば第二次大戦以降の「共通語」という「層」(strata)が全国のほぼ全世代が日常主として使用している「日本語」というものをかたちづいている、と見ることが出来る。単純化させて言えば、21世紀の日本列島は、この（大戦以降の）「共通語層」(common-Japanese-strata)が覆っているとみなすことができる（無論、かなり高齢者はいまだ「方言」の方を日常語として保持しているが今はひとまず別に置いておくとする）。

そのような、いわゆる言語学上の「言語」や、例えば時に比喩的に「生き語」等とも呼ばれる歴史学的時代区分での言語を想定した扱われかたよりもさらに細かく、比喩的に言えば“薄い”言語（＝方言）として地域形成を成している言語分布の層までも考察の対象としていくことが必要かつ有効であると考えられる。

またさらにこの「共通語層」のひとつ前の段階を、仮に、「江戸語層」として切り出してみよう。（もちろん、明治時代から終戦直前まで

模索されたいわゆる「標準語」政策による言わば「標準語層」なども検討できなくてはならないが、それはいまはひとまず別に置いておくとする。）

これまでの方言研究からは——多少厳密に言えば特に言語地理学研究と文献資料とによる対照研究の成果からは——、江戸を方言の「放射」の中心として形成された「江戸語の分布の層」が特に東日本に偏るかたちで東日本全体を広く覆ったと見なすことができる。言わば「江戸語層（江戸方言層）」(Edo・go-dialect-strata、江戸語庶民口頭語層)として把握できるような方言分布形成層である（具体的に例えば、「ハゲチャピン（禿げ頭）」(近世以降、安部（1996）参照）などに認められる。）これについては、これまでの方言研究の成果からも容易に理解いただけるであろう。

日本列島上の諸方言分布状況を視野に入れ、かつ、かなり古い長いスパンで日本語形成過程を考察していこうとする場合には、このような「共通語層」「江戸語層」のようなレベルまでも視野に入れた形成過程の研究が必要になってくると考えてみたい。本稿の後半に考察していく時の「層」「言語層」の解釈も、「語族」「語派」としての従来のような strata だけではなく、このような“薄い”層も含めた解釈にて進めてみることにしたい。それは、時に、量的な問題だけでなく質的な面にも及び、アクセント、音声、語彙、文法、さらにそれらの内部の諸要素ごとの形成をも、小分けにして考察する必要があるであろう。

そのような意味で、その点に関わる「層」の解釈をもうひとつ具体的に述べてみたい。上記の「江戸語層」の存在とは別に、その一方で、江戸時代の江戸を中心とした日本語の分布拡大と形成という、上記の「江戸語層」をあくまで（方言分布地図などに投影している）庶民の口頭語の世界のものであると想定するとするならば——「方言」分布の形成ということと話を始めているのでこの「江戸語層」まではまさしくその庶民口頭語を対象としての解釈なのであるが——、それと別に、江戸の支配階層でもある武士や知識階層による（漢文、漢文訓読語をその中心とする）「書き言葉（書記言語）」が、やはり江戸を中心として主に武士階層や知識階層に

よって発信され、全国の武士階層や知識階層、時にはそれ以外の階層に属する識字層に共有されていく、ということが併行して進行していたと想定される。

具体的な例で言えば、例えば、江戸幕府の法度やお布令による新語、新概念の普及や、例えば、蘭学などにおける翻訳漢語の知識階層への波及などを想定しておく、その一端を考えやすいであろう。あるいはまた、例えば『浮世風呂』での江戸女（原因理由の「～から」）と上方女（同「～さかい」）の口喧嘩場面に登場する書き言葉的共通語の存在を示唆する「ゆえ（故）」の位相を想像していただくのもよい。

○「お山：『から』だから、『から』さ。『故（ゆゑ）』という事よ。そして又、上方の『さかい』とは何だへ。」

この「ゆゑ」自体は、古代語まで遡る漢文訓読語起源であり、江戸語「から」でも上方語「さかい」でもない。江戸時代における書き言葉の全国的分布の「層」は、上位の「江戸語層」とは別に存在したことを見ることができよう。前述の江戸を中心とした口頭語（方言）の方を例えば「江戸方言層（江戸期江戸庶民語層）」（仮称）と呼んでおくとするれば、後者は「江戸期書き言葉層」（仮称）とも呼んで区別していくことができよう（事例の「故」は江戸中心からの放射以前の語であるのでこの「故」自体は江戸期限定ではないが）。

同様に江戸時代内では、西日本側の「（江戸期）上方方言層（江戸期上方庶民語層）」の存在も確認することができる（例、「べにさしゆび、べにつけゆび（薬指）」「チャピンアタマ（禿げ頭）」等）。

このような細かな薄い「層」の想定は、位相研究、文体研究の成果をも包含する分析観点である。古い過去に遡求するに従い、資料は徐々に乏しくなる。かつ、語彙情報、音声情報、形態法や構文法など文法情報はごくわずかな断片的な言語事象に限定されていく。そのような古い時代の言語研究を、今後新たに議論していくためには、その道具立ての方も上記のように、比喩的に言えばケーキのミルフィーユの1枚1枚の層を薄く剥ぎ取

って透かして見ながら咀嚼できる極薄のナイフやピンセットのような別道具が必要になってくると考えられるのである。

以下、「モンズーン・アジア」という広域での言語の諸分布を対象に考察する上でも、このような、従来とはやや異なる解釈を前提としたアプローチで以下の資料を提示していくこととしたい。

3. 「モンズーン・アジア」領域での言語分布現象——有声音の弁別性、母音数ほか——

この「モンズーン・アジア」という気候上の領域をひとつのヒントにして、言語現象における「類別詞」以外の類似分布を探索してみた。

言語史的に古い現象を探求する上で極めて重要な語彙範疇に「河川名(河川地形名)」のような語彙があることが、指摘されてきている(後述)。その名称としては、ほかに英語: hydronym、水名、水名学、水利名称、水系名などがあるが、以下「河川名」とする。

しかし、河川名などの語彙事項では、その古い年代での分布領域を見ようとする、言語内の方言や俚言である場合も含まれるので——つまり世界の諸言語資料からはなかなか分布の周縁部での有無を把握しにくくなる面が多いという事もあるので——分布領域の周縁部を地理的に確定しにくいのが難である。

そのような中、言語現象としては、鈴木豊氏の研究を得ることができた。鈴木氏が作成された有声音に関する世界規模での言語分布地図から示唆を得て(私信を含む)、「Voicing in Plosives and Fricatives (破裂音と摩擦音の有声性)」に関する現象を、WALS のデータから見つけ出すことができた。それが、【図4】と、その中の「破裂音・摩擦音共に有聲・無声の弁別が有標である分布図」である。

【図4】の◆は、有聲音を弁別的に使用していない「NO voicing contrast」の地域のみをプロットしている(地図内の左上の凡例参照)。現代日本語は有聲・無声の弁別をするので日本列島には◆はない。しかし、

古代語では遡って有聲・無聲は弁別的ではなかっただろうと推定されている。そこで、古代日本語を地図中に◆でマークしてみるとわかるように、この◆マークの分布範囲は主に「環太平洋」地域に分布している。先の「類別詞」の領域外へはみ出している言語は、アフリカ大陸とロシアには確かに数点ずつあるものの、それ以外ではモンズーン・アジア領域のごく周辺部への“染み出し”であるかのようにも見える。モンズーン・アジア領域と類似した分布を成していると思えることができよう。(加えて、アフリカでの諸現象にはモンズーン・アジアでの分布と共通する文化人類学的現象が他にも見られるので(安部(2025)の地図参照)、その点でもアフリカでの分布はむしろ注目しておくべき共通性かもしれない。)

言語現象としては「類別詞」「有声音の弁別性」以外にもまだ「指示代名詞の3分法」「母音数」「敬語法」などにおいて、関連性を検討すべき類似分布を見出すことができる(安部(2025))。言語現象全般について、今後にも広く探求していく必要がある。

4 「言語」「神話」「気候」の分布領域の一致

類別詞の分布領域、河川名の類似語形の分布領域の重なりが、もし何らかの古い段階における影響関係を示唆する可能性があるならば、それらの語源の検証作業とも併行して、これらが分布している領域を包含し得るような言語の世界史レベルでの動き(拡散や交流ほか)を検討していく必要もある。

さて、改めて Aikhenbald (2000) による「類別詞」の【図1】の分布を意識しながら、この領域における言語、文化を含む文化人類学的諸現象を追跡してみたい。実際には、河川名 nai に加えて後述する他の河川名「ヌマ」「サワ」などの分布も併せて考慮していくと、非常に興味深い地域的共通性を多く見出すことができる。興味深い現象は言語、神話、気候、植物、動物の分布領域であり、そして人類の移動拡散の足跡なども関わる

文化人類学全般におよぶ諸現象である。

それらの領域の、もっとも典型的とも言える現象を端的に示すとすれば、ひとつは広い意味での「東洋側における神話の類型的分布領域」である。また、気候学上の「モンスーン・アジア」の領域（アジアの季節風が支配する領域）であり、主食植物である「芋類」の分布領域であり、そして、「類別詞」の分布領域である。「神話」の分布は、「言語」を介したコミュニケーションと直接関わってくる。「モンスーン・アジア」気候区は、人類をも含む動物の分布・植物の植生と関わり、それらを食料とする人間の領域とも関わってくることになる現象である。

さて、【図1】の「類別詞」の分布範囲は、補助線からもうかがえるように、比較的明瞭な領域を示している。これを参考にしつつ、上記の諸現象の中で、これらに共通している領域とその周縁部の範囲を科学的客観的に把握出来るような現象は、気候学における「モンスーン・アジア」の領域であろう、とひとまず考えられた。

気候学では、大陸部のその領域について、【図21（吉野論文）】のように一定の複数の学説が提示されている。今回ここではそのうちのひとつ吉野政敏氏の解釈した境界線を、植物区画はか他の諸現象と近似している境界線として採用した（【図22、図23】も参照）。

「モンスーン」の影響する範囲は、通常、大陸部分（ユーラシア東部）でのその範囲が境界線で示されている（諸説あるのでその位置には若干の振れ幅がある）。一方の海側、つまり太平洋とその沿岸における範囲はおおよその広い範囲を示す程度で明瞭な境界線を示しているものはない。そこで今回は、太平洋とその沿岸の「モンスーン・アジア」の領域については、大陸部の境界線に接している海洋部の表面水温の等温線を参考に、【図20】（世界気候図）を想定した（この境界線については地図中の下部の説明を参照）。これら神話、気候学上のモンスーン・アジアの範囲は、奇しくも「類別詞」の範囲と極めて近似していた。「モンスーン・アジア」の範囲の設定がある程度、適切で妥当であろうことを間接的

に裏付けている。

4 日本列島および周辺地域における河川地形名の諸分布層

4-1 基層語探求における河川名研究の重要性

広い領域の、かなり古い段階の言語の分布状況を見る上で、河川名（river names, the terms for river courses, hydronym）を調べることが有効であることがこれまで指摘されてきている。Krahe 1954 は『言語と先史時代』において、次のように指摘している（いま邦訳による）。

○すべての固有名詞のうちでもっとも永続性があり、もっとも古いのは河川名であることが証明されている。（要約, (Krahe, Hans, 1954, *Sprache und Vorzeit*, Heidelberg, pp. 58~, [ハンス・クラエ『言語と先史時代』1970, 下宮忠雄訳、紀伊国屋書店]

○河川名は、その特質のおかげで、とりわけ言語学の資料として、ヨーロッパ大陸の最古の人類状態と最古の民族移動に光を与えるのにもっとも適している。（同上）

また、Schostakowitsch, W. B., (1926), は、シベリアの河川名の種類の語尾に一定のパターンがあることを指摘した。その特徴は、現在のどの言語にも属さず、既に消滅してしまった種族の言語の痕跡であろうと解釈した。（上記『言語と先史時代』による。原文ロシア語 Schostakowitsch, W. B., 1926, *Die historich-ethnographisch Bedeutung der Benennungen sibirischer Flüsse*. UJ 6-1・2.)

Kim（金芳漢）(1983) も、これらの研究を踏まえ、朝鮮語において、北の高句麗語と、南の百濟（Pekche）・新羅（Silla）の言語の相違を示す事例として、河川名の相違を取り上げている。（Kim, Bang-Han, 1983, *A Study of Genealogical Relationship of Korean Language*, [金芳漢 1985『韓国語の系統』大林直樹訳、三一書房] による）

安部清哉も、安部 (2001.8) 以降の研究 (複数) で、日本語と東アジアの河川名の分布について考察してきている (近時の安部 (2025) まで参考文献参照)。安部・Abe のこれまでの研究と本論は、上記のヨーロッパ・シベリアの河川名研究を継承、踏襲するもので、アジア広域における河川名の分布・パタンの特徴を問題として最初に明らかにした研究でもある。

なお、Wikipedia における「水名」の見出しでの解説の冒頭部分にも、河川名の名称の保守性と「より古い言語を再構築するためのツール」として次のように紹介されている。少し長くなるが参考まで紹介しておく。

○「水名」=水名 - Wikipedia

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B0%B4%E5%90%8D%E9%96%A2%E9%80%A3%E9%A0%85%E7%9B%AE>

「水名 (すいめい、英語: hydronym) は、水域の固有名である。hydronym の語源は、ギリシア語 ὕδωρ (ラテン翻字: hydor: 「水」) と ὄνομα (ラテン翻字: onoma: 「名前」) である。また水名学 (すいめいがく、英語: hydronymy) は地名学 (地名の分類学的研究) の一分野であり、水域の名前の研究であり、それらの名前の起源とそれらがどのような歴史を通じて移転されていくのかの研究である。水名には河川、湖沼、さらには海洋要素の名前を含む場合がある。

言語項目としての水名は、ほとんどの地名より保守的で変化しにくい。

ある土地に新たにやって来た人々は、しばしば、自分たちの言語で名付け直す (rename) より、既存の水名をそのまま維持しようとする [1]。例えば、ドイツのライン川はドイツ語の名前でなくケルト語の名前である [2]。アメリカ合衆国の川名 ミシシッピ川 (Mississippi) はフランス語や英語名ではなくアニシナーベ語 (Anishinaabe) [3] の名前である [4]。小さな川のローカル名はそうでもないが、特に大河川の名前はよく保存される。したがって、水名学は過去の文化的相互作用、人口移動、改宗または、より古い言語を再構築するためのツールとなりうる。

4-2 河川名 nai < *nahdi (現時点でのアジア側推定祖語形)

【注: 「Nostratic languages」仮説に対する参照比較語形: 古代ギリシア語: Ναύς, Nâias、複数形: ナーイアデス Ναύδες, Nâiades。補注参照】

かつて、古くはアイヌ語独自の単語として扱われ、アイヌ語が使用された領域を示す指標のように取り上げられていた「ナイ (nai)」という河川を表す語がある。ナイに近似する河川名が、沖縄の地名や、韓国語にもあることが指摘されるようになってからも、しばらくは同じようにアイヌ語の指標のように取り上げられることが続いていた。しかし、そのような扱いは、安部 (2007) で「モンスーン・アジア」領域で参照すべき関連語形の分布を提示して以降は見られないようである。

河川名「ナイ」に“類似する語形”は、【図 6】に掲載したように琉球方言、朝鮮語、さらに日本本土方言以外に、日本列島・朝鮮半島の周囲に広く分布していることが確認できようになってきている。

中でも、インドにある諸言語に、nai も含む類似語形が多く見られる点には興味深い。それらの諸言語の語形が、それぞれ歴史的にどのくらい古くまで遡り得る語形なのか、それぞれの語源が何であるか、遡及しても nai という語形に近似するままであるのか、などは、改めてそれぞれ言語学的に検討を継続する必要がある。類似語形を挙げてそれだけで直ちに同源であることを示せたという意図はなく、当然ながらそれぞれについて、言語史的な分析と考察は改めて別に必要である。そのような言語学的分析に関しては、本稿執筆者は基本的に、例えば風間喜代三 (1987) 「IV ことばの系統」(『東京大学公開講座 37 ことば』東京大学出版会) での解釈、考えと同じ立場にあると自覚している。

さて改めて、日本の河川名の「ナイ」には、以下に挙げるように、アジアに広く類似語形が認められる。古くは共通した祖語から派生した語形である可能性がある。

現在、それらの語形群から推定される (推定した) 祖語形は *nahdi で

ある。類似する語形は、ドラヴィダ語 (Dravidian)、及び、Munda (ムンダ語) などの Austro-Asian Language (オーストロアジア語) など、南アジアにも分布する。広くアジアに分布した共通した河川名の存在を仮設することができると考える。以下に【図6】に記載した語形と言語名とを列記しておく (安部 (2000) 版では未詳であった、中国語でのナイ、デイを追記する)。

○ East Asian Languages <*nahdi

Japanese; na (Old Japanese, cf. ABE2004.7)

nai, (Ryukyuan Dialect; sonai, pinai.)

nai, (Tohoku Dialect; nai, sappinai.)

nati, (river name; nati river)

Korean; ne (modern Korean)

nari, nai, narə, *nai, *na, (Middle Korean & Old

Korean, and Korean Dialects)

Tungus; nā

Gilyak; *nal, nallu, nalu, (ñayu as for a small river, nallo as for a small bay. [n] means [n] have “” mark over it.)

○ South Asian Languages <*nahdi

Mundari (Munda); nāi (a big river, from Bhaduri' s A

Mundari-English Dictionary)

Santāli (Munda); nāi,

; nāi (from Campbell' s English-Santali Dictionary)

; nala, nali, noli (stream, ditch, from A Comparative

Study of Santali and Bengali)

Sāvāra (Munda); nāyi,

Kurumba (Dravidian); niru,

○ West Asian Languages (Altaic Languages) <*nahdi

Turkish ; nehir [nehir]

○ Indo-Aryan (Indo-Europeans) <*nahdi

Hindi ; nadi [nēdi:]

Bengali ; nadi [nodi]

; nala, nali (stream, ditch, A Comparative Study of

Santali and Bengali)

Nepalese; nadi [nadi]

◆新規追記 2024

○ Chinese [ner, nei, ˈdei/*nai] ナイ、デイ、*土の交じった茶色い

「水や水の流れ」⇒「黄河」「泥=水の交じった柔らかな土」(参考:

「泥」の古音、『学研漢和大辞典』。「川」は「泥」に吸収されたと考えてみた。)

5、サワ (沢)、スガ・シガ・スワ (沢、水、氷、諏訪) の分布

日本語の小川・沼を表す語に sawa がある。また、この sawa と同源と考えられる川・水に関係する地名に、以下のものがある (、詳しくは安部 (2025) 参照)。

suwa 諏訪、singa 滋賀、sungo (<sungaφu <sungapu)、須郷・菅生 (ng= [ŋ])

これから日本語祖語形として次の語形をかつて推定した。

Proto-Japanese (PJN) *sangwa (or *sungwa)

この語形再構には CAD (1995) = A Comparative Austronesian Dictionary 1995 = の諸語形とそこでのヘスベロネシア祖語形、PHN : sungay、西マラヤポリネシア語の祖語形とを参考にしていた。しかし、日本語の祖語形としては *sapa, *saba (サバくサワ (沢)) のままでもよいのではないかと考えられるようになった。

というのも、オーストロネシア語における河川地形名に、sapa, saba というまったく同一の語形があるからである。その語形の一部は、下部に

列記するが、詳しくは、Darrell T. Tryon (1995) や、最新の Blust, Robert and Stephen Trussel (2020) Austronesian Comparative Dictionary, Web Edition. をご参照いただきたい。

南太平洋の言語においては、suba, sopa, suba, sowang, sungoy, sungay, sungai, sungay, sofui, などの類似語形が分布している (下線付きの ng は鼻音の [ŋ] 音)。日本語の サハ (沢) (<sapa/saba), siga, sunga (水―東北方言) との関係が問題になる。

Darrell T. Tryon (1995) でも、諸語形のなかに、日本語と同一となる sapa, saba が報告されているが、さらに、Blust and Trussel (2020) では AN 語族の祖語形として、*sapaq が再構成されているのである。この一致は極めて興味深い。

◆ Proto-Austronesian *sapaq “stream, river” and its reflexes

日本語「沢」が、AN 語族と同源であると詳しく論証したのは安部清哉 (2001.8)、安部 (2004.7) が最初かと思われるが (先行する関連の指摘は後者および安部 (2025) 参照)、河川名での同一語形の一致という点では非常に注目される。というのも、日本の本州以南での地形名としてのサワ自体には方言的偏りが、ナイ、ヌマ、イケ、タニ、ニタ・ヌタなどの一連の河川沼沢地形名のように認められず、ほぼ本州以南に広く分布していると解釈できるからである。西日本でも『万葉集』での使用例があるので古代西日本でも使用されたとの解釈を含む。北海島はアイヌ語の分布があるのでひとまず別にしておく。)

なお、安部 (2004) 段階では、Darrell T. Tryon (1995) を踏まえて、祖語形を [*səŋwa ~ *səŋaj] とした。その後、知った Blust and Trussel (2020) での祖語形は、上記のように日本語サワ (サハ < sapa) により一致している。Darrell T. Tryon (1995) と、Blust and Trussel (2020) とでは、解釈が異なり、いずれを無難な説とするか、安部の解釈も変更する必要があるのか、が問題となる。一方、安部の解釈で重視した日本語方言にある米・ツララなどにおけるシガ・スガ、諏訪湖のスハ、湖 (巨大な

淡水) がある滋賀県のシガなどの語形は重要であり、かつ、これらと一致する語形も多く Darrell T. Tryon (1995) に列記されているのである。

そこで、同じ水源地形名であるスワ系統 (河川名) と、シガ・スガ (水、水、淡水、湖) は同語源の異形態ないし変異形か派生形として AN 語族から受容されたか、異なる段階にて層位を別にして重層した可能性もあるのではないか、など整合性が得られる解釈の可能性を試考していた。模索していたところ、Ochiai, Izumi (落合いずみ) (2024) においてオーストロネシア語族内部においても、水名 (淡水、“fresh water”) と河川名 (rivername) との分岐と段階的発展および受容時期の相違による解釈があることを見出した。その考察対象は AN 祖語と主にタイアール語であるが、類似する現象は日本語でもあった可能性が考えられよう。それゆえ、現時点では、日本語方言内部においては、河川名としてのサワと、水源名としてのスガ・シガ・スワなどは同源語形の異形態として併存していたことと、また、成立しないしその受容には時代的前後関係も考え得ること、と解釈しておくことにしたい。

さて、この日本語「サワ」と同源の可能性が考えられるアイヌ語を含む MA 内の河川名 (swamp などの水源地形名も含む) は以下の通りである。

Austronesians; ‘river’ ① *AKL suba? : AKL = AKLANON,

cf. ABE2004.12,

*PAL sopa? : PALAWAN

*KAG sūba? : KAGAYANEN,

SAB sowang : BĀNGINGI SAMA

② *MUR sungoy : MURUT (TIMUGON)

*BAT sungē : BATAK TOBA

*MIN sungay : MINANGKABAU

*IND sungai : INDONESIAN

MAD sungay : MADURESE

③ *RTU sfu : ROTUMAN (Porinesian)

PHN : sungay

PWMP : sungay (cf. MGY=MALAGSY MERINA in CAD1995)

※Abridiation : PWMP : Proto-Western-Marayo-Polynesian,

PHN : Proto-Hesperonesian,

PAN : Proto-Austronesian

AINU; sar (<*sar・ga<*sanga) (swamp, by Slawick)

sa (river sides, by Batchelor)

sa (plain, by Batchelor)

sara (A plain covered with a kind of sedge, by Batchelor)

上記の Austronesian の語形は、CAD (1995) (A Comparative Austronesian Dictionary, 1995) による。CAD (1995) の補注には、次の語形と意味も挙げられている。

① AKL Proto-Southern Philippines; *suba?

PAL sapa? 'small river' ; sosapa? 'stream, brook' .

KAG suba? 'river' ; sapa 'stream, brook'

CAD (1995) では、ヘスペロネシア祖語形(祖語形 etymon) は、PHN : sungay、西マラヤポリネシア語 (PWMP : Proto-Western-Marayo-Polynesian) の祖語形は、sungay である。

このほかに、シナ・チベット語族 (Cina-Tibetan) のチベット・ビルマ語派 Tibeto-Burman のタマン語 Tamang、同じくチベット語、ベトナム語、カンボジア語、ビルマ語の以下の単語も関係する可能性が高い。中には中国語の「川」の古音が起源の語形が含まれている可能性がある(例えば、ベトナム語)。今後、これらとの関係も検討していく必要がある。

タマン語 (Tamang (=Murmi)) : syong (river, CDLIHA1978)

チベット語 : shur (shur) (as for ditch, (溝), Kitamura・Nagano1990)

ベトナム語 : sông [so・ŋm ①] (river)

カンボジア語 : stúŋ, [w =u +'] (river)

ビルマ語 : 'river', khyong [chauN:]

また、インドにある Austro-Asia 語族の中の Munda 語族の1つである Santali 語では saba である。この語形は、先に見た東アジアの以下の語形と、同語源と考えられる。

○ Santali; saba (small river, by Campbell' s English-Santali Dictionary)

cf. Japanese; sapa, *saba (small river, swamp)

PAL (Palawan); sapa? (small river)

KAG (Kagayanen); sapa (stream, brook), suba? (river)

cf. *saba > ? ? < sravati (SKT) > stream 【補注】参照。

これら遠く離れた言語では母音 a が共通している。これらから推定される祖語形は sapa < *saba < *sagwa (< *sargwa) < *sangwa であったが、*sapa と見てもよさそうである (Blust & Trussel (2020))。これらの分布は、インドのオーストロ・アジア語、太平洋のオーストロネシア語から東北アジアの日本語、アイヌ語まで及んでいる。アイヌ語とオーストロネシア語との関係については、村山七郎 (1993) などでも指摘されている (村山七郎 1993『アイヌ語の研究』(三一書房) 参照)。

5、河川地形名 tani の偏在と方言境界線

日本語の河川地形名(以下、河川名)タニ(谷)の語源について新村出(1916)は中世韓国語 tan と同源とされた。そのタニが付く河川名の分布(鏡味完二 (1958))は、これまで西日本と考えられていたが、詳しく見る

と関東以南に偏る。日本列島のほぼ利根川以南、九州中部以北のほぼ「中日本」にのみ分布する (安部 (2003・7) などの地図参照) という特徴をもつ。その分布範囲「中日本」には特徴的方言分布が確認でき (安部 (1997) 以降)、周囲の「外日本」の方言特徴に比較して、時代的に文化的に新しい段階での分布である傾向が認められる (安部 (1997) 以降、安部 (2001) 参照)。また、利根川以南という特徴は、利根川という大河川と、古代に関東平野全域が海であったこと (最温暖期の約 6000 年前後には「古・奥東京湾」という入り海をなした) という、気候と自然条件に制約を受けたことが推定される。

この日本の河川名分布の特徴と類似のことが、東アジアの大陸部にも認められる。河川地形名「河」「江」「溝」「溪」の分布にも、方言分布との一致と、自然条件との一致が確認できる (安部 (1999))。日本とアジア大陸での分布の共通性は重要な意味がある。

6. 「ヌマ」(沼) (*nub)、「ニタ」「ヌタ」「ヌタ」(*nut) ——湖沼泥湿地地形名 (cf. Abe 2004.7.10)

沼沢地および湿地を現す単語も、日本語の近隣に日本語と類似する語形の分布がある。日本語、アイヌ語、韓国語、ツングース語などの沿海州の言語に確認することができる。以下に挙げる。

日本語では、ヌマ numa と古語の nu がある。また、佐竹昭広 (1955) が推定している古語ヌバ *nuba (*swamp, mud, black) がある。これは、古語の nuba・tama (黒玉、泥の玉、as for Black-ball or ball maid by mud) のヌバの語源を沼と同源する解釈である。沼から、沼→泥→黒という意味的連想によって、沼の泥、泥の黒い色という意味を持つようになり、古語 nuba・tama (black ball, 黒い玉) が生まれたとすると。m と b とは音韻的交替形 (phonetic allphone) である。

また、古語 nu と numa、nuba の語形の関係から、それらの間に以下のような変換形 *nub, *num を推定することができる。

nuba, numa > *numba > *nub, *num > nu

以上から、日本語のヌマ swamp を表す祖語形は次のように考えられる。

Japanese 'swamp': numa, nuba, nu, *nub, *num, *numba,

アイヌ語の沼または濁り水、黒を表す語として、*nup- という共通する形態素 (morpheme) を抽出する (探し出す) ことができる。佐竹 (1955) は次のような単語から、・泥・濁り水を表す共通する語幹 *nup- を抽出してみせた。

Ainu; *nup- (濁り水, mud)

cf. Ainu; nupur-ka (形容詞, 黒くする),

nupki (泥だらけになる、濁水の如く濃厚なる)

nupki-at, nupki-ot (泥だらけの)

nupur (黒い、濃厚な、濁った、暗い)

これらの語形のほか、動詞「濁る」を表す「núpki」がある。また、nup を「泥炭の原野」(片山龍峯 (1993)) とする解釈がある。これらから nup- は泥・泥炭、湿地、つまり沼と同じ意味で使われたことがわかる。

Ainu; *nup- (swamp, mud, 湿地、濁り水)

韓国語の沼は、nup であり、また、古代韓国 (新羅国、Silla) の地名として agu-numa という名前が、日本の『古事記』に記録されている (安部 2004.7.10)。

Korean: nup,

numa (Old Korean = Silla Language, agu-numa in 'KOJIKI')

モンゴル語に次の語形が確認できる。

Mongolian; HAMA ɣ [namug] [名] 沼沢、泥濘地; 深みにはまること。」(Ozawa 1994) (小沢重男 (1994), 『現代モンゴル語辞典改定増補版』大学書林

Mongolian; HAMA ɣ [namug], n.marsh, swamp, bog. (名) 沼地、

湿地 (D.Tömörtogool1979)『現代蒙英日辞典』開明書店

この語形 [namug] は母音 [—a—u] が numa の母音転倒 (vowel alternant) とも解釈可能な範囲にある。

チベット語には、n-d 交替形 (n-d alternant) と解釈できる語形がある。

Tibetan; dam (dam) 〈沼地〉 marsh (北村・長野 (1990))

Tibetan; dzab (rdzab) 〈泥〉 mud (北村・長野 (1990))

(北村甫・長野素彦 (1990)『現代チベット語分類辞典』汲古書院)

A Classified Lexicon of Modern Tibetan by Hime Kitamura and

Yasuhiko Nagano, 1990, Kyukoshoin, Tokyo,

最初の例の dam を仮に語頭の d—n 交替形 (n-d alternant) と見ると nam となり、モンゴル語 namug とも類似することがわかる。

namug > namu > nam > dam > *dab > *dzab > dzab (rdzab)

さらに、上記のような、nam ~ dam ~ の語形と類似する語形で、意味的に類似する「海」を表す単語を調べると、ツングース諸語に属するウイルク語、満州語、ゴルジ語、エウエンキ語、ラムート語の語形を挙げることができる。

Uilta; namu [acc nammoo] (as for sea) (池上二良 (1997)『ウイルク語辞典』)

Manchu; namu, (as for sea) (朴炳采 1968)

Goldi; namu, (as for sea) (朴炳采 1968)

Evenki; lamu < *namu (as for sea) (朴炳采 1968)

Lamut (=Even); nam < *namu (as for sea) (宋 敏 1999)

Cf. Tungus; namu (as for sea) (都 守照 1977)

これらの海を表す namu は、上に見たモンゴル語の namug (swamp)、及び、チベット語の dam (marsh) と、類似する意味、類似する語形であるから、語源が同じ語形と解釈できる範囲にある。これらでは、沼の意味が海の意味に変化したものとも解釈できる。なぜなら、海が見られない

内陸では、湖や沼は、意味的に巨大な水溜りである「海」とほとんど同じように理解されるからである。そのような解釈の道筋はあるものの、「海」を表す語を「沼」の語形と一緒に扱い得るかは今後もさらに慎重に検討を継続する必要がある。

以上のように、東アジアには、*numa, *nuba という沼・海を表す語形が広く分布していることがわかる。

次に南アジアを見ておこう。オーストロ・アジア語の1つのムンダ語 Munda に黒の意味で nuba がある。黒の意味は、アイヌ語の nup (< *nub, as for swamp, mud, black) と共通している。

Munda; nuba (dark)『Mundari-English Dictionary』

この南アジアのムンダ語に同源 (cognate word) の可能性のある語形が見られる点は、川 *nahdi, 沢 (小川) *senay と同じであり注目される。

以上、河川名ナイ、サワ、ヌマ (*nahdi, *sapa, saba, senay, *nub) のアジアにおける分布を検討してきた。日本語、韓国語、アイヌ語、ツングース語ほかの、東アジア、東北アジアの諸言語と、オーストロネシア語、さらに、オーストロ・アジア語、ムンダ語などの南アジアの言語にも、同源語の可能性が考えられる語形が分布していることが確認できた。

7、中国語における河川地形名「溝」「溪」の偏在と方言境界線「秦嶺・淮河線」

中国の河川名に付く「溝 kou」「溪 chi」は、北が「溝」、南が「溪」にわかれる。境界はおおよそ黄河と長江 (揚子江) の間の淮河から成都そして秦嶺山脈にかけてである。(安部 (2025.3) の分布図参照、陳正祥 (1982)『中国歴史・文化地理図冊』東洋書林の図参照。)

中国語の方言分布にもおよそこの位置で南北の相違がある。北部は北方官話系方言、南部は広東語に代表される南方系中国方言、及び、その西部の少数民族言語の分布地域である。

中国では、漢の時代から、秦嶺山脈—淮河を結ぶ線で自然や文化が異なることが知られていた（陳（1982））。中国の研究では、「チンリン—ホイ線」と呼ぶ。年間降水量 1000 mm の境界線と、一月の等温線（平均気温）0 度の境界線とがほぼ同じ位置にあり、「秦嶺—淮（河）線」はこの気候条件の相違による。農業でも、この境界線の北部が畑作（麦作）地帯、南部が水稻（稲作）地帯である。この境界線の東側の延長線は、朝鮮半島と日本列島にも続いており、朝鮮半島における「麦作と稲作の境界線」と、「気候の境界線」と「河川名の境界線（北 mai・南 nari）」とは一致する。

秦嶺—淮河線での相違は、文化・民俗・習慣にも及んでいる。例えば、①東北地方（旧満州）移民出身地南限、②オンドル（火偏の坑）南限、③綿入れ衣服南限などが、この境界線に重なる（大林太良（1986）・Joseph E. Spencer（1954）『Asia, East By South』、安部 1999）参照。

8、中国語における河川地形名「河」「江」の偏在と「森林境界線」「降水量 400 mm 線」

中国にはもう一つ河川名「河」「江」の南北対立がある（安部（2025.3）参照）。この 2 語も秦嶺—淮河線での相違をもつが、「河」「江」が「溝」「溪」と異なる点は、南の「江」が、「河」の北側になる朝鮮半島及び中国朝鮮族の居住地域、さらにロシア領まで分布している点である。「江」の南北の分布と中国北方民族の南下の歴史から解釈して、もとの「江」の領域に北の「河」が南下して割り込み、「江」を北東辺境部と南部に 2 分したものと推定される。「溝」「溪」より古く、「江」がより広く分布していたことが推定される。

「江」が南北に 2 分される前の「江」の領域は現在不明であるが、現在の「江」の分布に類似した分布は森林地帯の分布領域である。黄河河口部や北京付近は、以前は森林が多かったものが人口集中によって伐採され森林が激減した。北西内陸部の草原地帯と森林地帯を分ける境界は、やはり降水量 400～500 mm の水の境界線である（安部拙論に分布図をかつて示

した）。

9、中国・韓国・日本の河川地形名の背景としての気候・自然条件の境界線

中国の河川名「河—江」と「溝—溪」の境界は、気候（降水量・温度）の境界線と一致し、麦作・稲作の境界とも一致していた。朝鮮半島の河川名の境界も、気候の境界、麦作・竹（南方植物）の境界と一致する。日本の河川名の境界の東部（利根川）は、稲作文化の広がりを投影したと解釈されている「餅無し正月」（坪井洋文（1987））の分布と一致する。

10、モンソーン・アジア言語層の可能性とそれを示唆する同地域の共通分布特徴——水（降水量）・食料（芋栽培）・保存食文化（麴発酵）・大型動物（虎）——

この領域内部での上記のような河川名の分布や類別詞の分布、また、いくつかの言語現象（有声音の弁別性、指示代名詞の 2 語体系、母音数、待遇表現など）の分布状況から見ても、かつて少なくともいくつかの言語現象が共通して分布したともし仮定できるとするならば、人や文化での共通分布、さらに、それらを支えた共通現象も同じように分布していることが確認できると考えた。

果たして、このモンソーン・アジア領域では、水量（夏期 100 mm 以上）・芋栽培・発酵保存食文化（麴発酵酒・納豆・なれ寿司など）・虎の分布が、極めてよく一致している。

以下に、言語、文化、動植物ほか、この領域にひろくみとめられる文化人類学的諸現象を列記し、当該分布地図を掲載しておくこととする。

《モンソーン・アジア文化圏の文化人類学的諸特徴》

図 1-① 「類別詞」の世界的分布 Distribution of numeral classifiers in the languages of the world Alexandra Y. Aikhenvald (2000)

Classifiers, Oxford University Press.

図1-② 「類別詞」の世界的分布「Alexandra Y. Aikhenvald (2000) (図1-①を太平洋中心地に組換えたもの)

図2-① モンスーン・アジア(MA)の領域(安部2003.7)(アルタイ語圏と重複する領域に注意)

図2-② モンスーン・アジア文化圏の領域図(アフリカと関わる領域を網線で示す:縦括)安部清哉(2025版):Region of the Monsoon Asia Cultural Sphere (MSCS.) ABE (2025)

図2-③ モンスーン・アジアの領域とオーストロネシア語の拡散範囲(安部(2025.3c))

図2-④ 方言圏 α - β - γ の境界線(南方からの影響の可能性が考えられる方言圏 α (AN語とは限らない)(安部(2023))

図3 各言語音における母音の数(Vowel Quality Inventories) (THE WORLD ATLAS OF LANGUAGE STRUCTURES (WALS.), 2A: Vowel Quality Inventories)

図4 破裂音と摩擦音における有声化(WALS. 4A: Voicing in Plosives and Fricatives)

図5 代名詞における待遇法の弁別(WALS. 45A: Politeness Distinctions in Pronouns) (以下の記号●◆のみ地図中に表示)

● 記号7言語:礼儀正しさのために避ける代名詞(がある)(二人称代名詞は礼儀正しさの理由から主に使用を避けられる)

◆ 記号15言語:複数の丁寧さの区別(二人称代名詞は複数の丁寧さの区別を記号化する)

【○136言語:丁寧さの区別がない(二人称代名詞は丁寧さの区別を記号化しない)】

【△49言語:二元的な丁寧さの区別(二人称代名詞は二元的な丁寧さの区別を記号化する)】

図6 河川名「ナイ」の言語地図(Abe (2006)、安部(2008)に追加)

図7 河川名「サワ・シガ・スワ(沢・小川、水、淡水)」の言語地図

(安部(2004.12)に追記・改編)

図8 沼沢湿地名「ヌマ・ヌバ(沼、泥、黒)」の言語地図(安部(2000)を地図化)

図9 木桶「ヒツ・キツ(櫃)」の言語地図(安部(2009.3)を地図化)
*git, *kit~*bit, *pit (k-p alternation) as for "pail, bucket, fub made of wood" (櫃) in Monsoon Asia

図10 酸味「スッパイ・スッカイ(酸っぱい)」の言語地図(安部(2007.3)を地図化)

図11 原数の分布 I=3の支配、II=4の優越、III=2の優越
(Frobenius (1929): 327, 大林太良(1999)『銀河の道 虹の架け橋』より)

図12 フロベニウス Frobenius の(東洋・西洋の)神話分布図(全20図、大林太良(1975)『神話と神話学』による日本語訳のタイトル)

【///、///】は分布範囲、**+**マークは「放射」的分布地点】

12-① 英雄が母の死後生まれる

12-② 矢の梯子

12-③ 柱の悪戯小僧

12-④ 海の怪物に吞まれた英雄

12-⑤ 太陽の子(原祖 太陽 男性)

12-⑥ 花からの誕生

12-⑦ 死体から作物発生

12-⑧ ///木彫から魚(および鰐)発生 **+**ユグラ族とハンガリーにおける放射

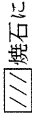
12-⑨ ///釣られた少女 **+**放射

12-⑩ 生命の卵

12-⑪ 動物が秘密を知っている

12-⑫ 旅の道づれ

12-⑬ 見映えのせぬ騎士

- 12-⑭ 井戸の旅
- 12-⑮ 魔法の食卓など、奇蹟の事物（集団的）
- 12-⑯ 《開け胡麻》
- 12-⑰ 交互変身および連鎖的変身
- 12-⑱  焼石による怪物退治 **+**放射
- 12-⑲ 焼鉄による怪物退治 **+**放射
- 12-⑳  焼鉄  焼石
- 図13-① 「神の体から生ずる有用植物」神話の分布（Frobenius 原図）（後藤明（2002））
- 図13-② 「失われた釣針」（Frobenius 原図）（大林太良（1961））
- 図14-① 天父地母神話の分布（Hermann Baumann, 1955, 「Welteltern, Welt- (Menschen-) Ei, "Weltriese"」）
- 図14-② 天父地母神話の分布「Welteltern, Welt- (Menschen-) Ei, "Weltriese"」（Bauman 原図の大林太良（1996）による略図）
- 図15 「大地が水上に落ちる」【Berezkin ベリョーツキンの神話分布図】（Berezkin（2012））
- 図16 「見えない釣針」型説話の分布【Berezkin ベリョーツキンの神話分布図】（Berezkin（2012））
- 図17 旧石器時代の石器分布—東西分布および東洋の「非面加工石器」の分布（ルーウィン（2002））
- 図18 現世生霊長類の地理的分布（R. ルーウィン（2002.1））
- 図19 霊長類における類似ウイリスの地理的分布（Stephan Oppenheimer（2007））
- 図20 モンズーン・アジア気候のアジア・環太平洋の領域（安部清哉（2004・12））
- 図21 Monsoon Asia Area（Yoshino、吉野正敏（1999））
- 図22 夏の季節風のおよぶ範囲（小泉武栄ほか著（2002）『新しい社会科学』）

- 地図』東京書籍）
- 図23 年間降水量20インチ未満とそれ以上の地域の境界線（京都大学グローバルCOEプログラム（2012））
- 図24 動物分布 東洋界と古北界（旧北界）の分布境界（『日本動物大百科』）
- 図25 世界における酒類の分類と分布（「こうじ発効酒+唾液酒」の領域、森下正明・吉良竜夫（1967））
- 図26 ナレズシ、小エビ塩辛ペースト、塩辛、魚醤油の分布（石毛直道、ケネス・ラドル（1985）「塩辛・魚醤油・ナレズシ」『論集 東アジアの食事文化』平凡社）
- 図27-① モンズーン・アジアの主要作物分布（根本・倉嶋・吉野・沼田（1959））
- 図27-② モンズーン・アジアの米作（根本・倉嶋・吉野・沼田（1959））
- 図28-① さといも（*Colocasia esculenta*）の原産地と栽培地域（高柳謙治（1986））
- 図28-② サトイモ類の分布（堀田満（1983）「イモ型有用植物の起源と系統—東アジアを中心に—」佐々木高明篇（1983）『（日本文化の原像を求めて）日本農耕文化の源流』日本放送出版協会）
- 図29-① ヤマノイモ類2種の栽培（堀田満（1974）『植物の分布と文化』三省堂）
- 図29-② ヤムイモの熱帯種 *Dioscorea alata* と温帯種 *D. batatas* の分布（森下正明・吉良竜夫（1967）『自然 生態学的研究』中央公論社）
- 図30 コニニャク類 *Amorphophallus* spp. の食用種の分布（若林1957により一部修正）（森下正明・吉良竜夫（1967）『自然 生態学的研究』中央公論社）
- 図31 犬の食用圏——犬を食用とする習慣が（現在・過去に）あるアジア・太平洋地域（Simoons（1962）により鈴木秀夫（1978）『森林の思考・砂漠の思考』での作図）

- 図 32 中国の農耕領域（大林太良（1986）「東アジアの文化領域論」植原和郎編（1986）『日本人の起源』小学館）：作物は重要度の順に挙げてある、バックの資料にもとづきスペンサー作図（Jcsepr F, Spencer. 「Asia, East by South」, 1954 による）
- 図 33 日華区系の区分（北村四郎（1957）「植物の分布」北村四郎・村田満（1957）『原色日本植物図鑑』保育社）
- 図 34-① トラの本来の生息領域（通年生息範囲） IUCN（1996）Wild Cats, IUCN, Switzerland, Kristin Nowell & Peter Jackson edit.,
- 図 34-② 【トラの】8 亜種の本来の分布（19 世紀後半）（Mel Sunquist（サンキスト, 1986）「トラ」『動物大百科 第 1 巻食肉類』平凡社）
- （1 ペンガルトラ、2 マレートラ、3 アモイトラ、4 カスピトラ、5 チャウセン（シベリア）トラ、6 スマトラトラ、7 ジャワトラ、8 バリトラ）
- 図 35-① ハツカネズミ（キャスタネウス群）（Hbb-d 型を含む）の世界分布（森脇和郎・米川博通（1993）：遺伝学的に分化している三群のハツカネズミ亜種の地理的分布）
- 図 35-② ハツカネズミ亜種グループの地理的分布（森脇和郎・米川博通（1993））
- 図 35-③ 東アジアにおけるヘモグロビン β 遺伝子多型の分布（森脇和郎・米川博通（1993））
- 図 35-④ ミトコンドリア DNA 多型からみたマウスの移動とヒトの移動（森脇和郎・米川博通（1993））
- 図 36 カエルの分布（Brevicipitidae 属バレーレセプス）（Philip J. Darlington, JR., 1966, Zoogeography）
- 図 37 クワ（桑）属植物の自然分布図（村上昭雄（1997）「カイコの起源と絹の文化」『文明と遺伝』）
- 図 38 モンゴロイドのオセアニアへの拡散のシナリオ第 2 幕（今から 6000～2000 年前ごろ）（片山一博（1996））
- 図 39 【船の造船技術の特性の数と分布範囲】「中心地の設定」（山口晶子

- （1995））
- 図 40 キイロダカラカイの分布図 白井祥平（1997）
- 図 41 世界語順分布（山本秀樹（1996））
- 図 42 語順の特性の分布図（Colin P. Masica（1976））—日本語の文法（語順）における北方言語との類型（OV, Adj.+N, etc.）
- 図 43 The language distribution is based on Carte xx of Meillet & Cohen, Les Langues du Monde（1952）The Sound of Language（1976）

これらの諸現象の個々の分布に関する詳しい紹介は稿を改めることとする。最後に挙げた【図 41、42、43】からは、MA 領域の日本語は、北方の諸言語の特徴の一部を、類型として持っていることが明らかに見て取れる。その類型性がどのようなプロセスで内部に取り込まれることとなったのかも、併せて検討していく必要がある【補注 2】。

ところで【表 1】（図 40 の後に掲載）は大野晋氏による「言語と食糧起源神話の相応」年表（大野晋（1980））である。ここでは「タミル語広まる。」とあるのは弥生時代「前期（B. C. 300）」と位置付けている。大野氏は「タミル文明が氷田稲作・金属使用・機械を持って到来したとき、言語もそれに随いて日本の国土に広まったものと考えられる。」（大野（2002）版の 98 頁）とする。一方、モンクソン・アジアの文化圏では、神話とイモ文化とが深い関わりを持っている（ハイヌヴァレ神話等）。それはインドも含まれる。類別詞【図 1】の発達は、食糧にもなる動植物の多様性や食料の豊富さが文化的背景にあると推定される。一方、日本列島の方言分布には、弥生期以降半島・大陸文化の影響が濃厚な段階と領域があり（【図 41、42、43】参照）、さらにそれ以前の段階に南方からの何らかの文化の影響を受けたと考えられる段階も認められる（「方言圏 α 」、安部（2023））。それに対してモンクソン・アジアの文化圏の諸現象（特に食糧のヤムイモ等）とのつながりはさらにそれらのひとつ前の古い段階のもの

であると推察される(【表1】にも「ヤムイモ」段階がある)。もしインド南部の言語・文化と日本とが関わってくる時期があるならば、それは大野氏の表での解釈段階よりも前の「ヤムイモ」段階(【表1】)である可能性もある。大野氏はタミル語文化は直接的に「到来した」とした(その後の論では近似文化による間接的影響によるととれるような変化もうかがえるが)。本稿の諸分布図からは、南インドの言語(語彙)や文化との一致や類似は、このMA領域の周辺部での周囲的残存による可能性も浮かび上がってくる。インドの古い段階の諸言語(例えばムンダ諸語等)との比較は、改めて考えていく余地があることになる。

また、環太平洋という広域の諸言語と日本語との類型性を問題とする研究として、松本克実(2007)『世界言語のなかの日本語』がある。そこで取り上げられている環太平洋の言語事象は、本稿で取り上げた【図3~11】とはまだ重なるものがなく、領域もやや異なっているが、それらを本稿のMA文化圏の視点から検証するのは今後の課題でもある。

小泉保氏も指摘された「モンスーン・アジア」という領域の言語の形成過程を、上掲の文化人類学的諸現象とも比較しつつ、広く検討していく必要があると考える。

【注1】 加えるに、琉球列島の諸言語群も。広義には「日本語」であるが、日本国内でもっとも権利ある言語学の辞典である『言語学大辞典』では、「日本語」とは別に「琉球列島の諸言語」として立項されている。また、ユネスコでは世界の危機言語のなかの一群として「琉球諸語」とされるいわゆる「方言」が6つの「言語」として、八丈島語、アイヌ語とともに挙げられている(重大な危険：八重山語、与那国語。危険：奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語)。

【補注1】「Nostratic languages」仮説に対する参照比較語形として、次のような類似を今後の研究材料としてあげておきたい(直ちにbとvがつかうとは考えない)。

cf. *saba <?> sravati (SKT, サンスクリット) > stream

本稿執筆者は「Nostratic languages」論の支持者ではない。しかし、MS領域の祖語形を再構成していくと、一方でインド・ヨーロッパ語族の古語形の中にそれに類似する語形があることに気づく。そのようなことが、ナイの研究以降継続して

非常に気になっている。先に挙げたナイのほか、現時点で候補となっている収集してきた語彙は下記の1)~7)である。

これらの語彙に見られる特徴としては、特に、ギリシヤ語などの神名(精霊、下級女神=ナイアーデス)、星座名(射手座 Sagittarius)や、古語起源が想定されるか(木製箱、植物繊維)、あるいは重要語彙(弓箭、味覚語彙)など、いずれもかなり古くからの基礎語であろう語彙であることが注目されてくるのである。これらのことは、数年後最後の原稿においても活字にしようかと思っただけで収集していたことであつたが、身辺の事情を鑑み、ここに記録しておくこととした。断片的備忘とすることを告げたいだけ幸いである。

1) ◎「河川」の日本語「ナイ」、アイヌ語「ナイ」、朝鮮語「ナイ」(中国語「泥」)に対するギリシヤ語 Nāias、ギリシヤ神名 naiad

河川名 nai < *nahdi < ? > *naiad, Nāiades pl. ナーイアデス, Nāias

= (古代ギリシヤ語 : Nautās, Nāias、複数形 : ナーイアデス Nautādes, Nāiades)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%82%A4%E3%82%A2%E3%82%B9>

2) ◎「矢・弓箭」の日本語「サチ、satisaid,*sa」(矢、幸)(中国語「箭」)に対する「ラテン語 sagitta 矢」(星座名の語源)

3) ◎「(木製の)器、木桶、桶」の「キツ、*kwitu, *kwiti」(ヒツ、樽)(中国語では「櫃」)に対する箱の意の「ギリシヤ語 kouti クタイ(現)クテイ、kouri, 箱、ラテン語 capsula」

4) ◎「スッパイ、酸味がある」の「スッカイ、スカシ、*sukwa-, *sur」(中国語では「酸」)に対する「sour」

■参考:「sour」<https://www.etymonline.com/jp/word/sour>

「古英語の sur は「味が鋭く酸っぱく、発酵した」という意味で、原始ゲルマン語の *sura- から派生しました(古ノルド語の surr、中世オランダ語の suur、オランダ語の zuur、古高ドイツ語の sur、ドイツ語の sauer などとも同源語です)。PIE ルーツの *suro- から派生しており、「酸っぱい、塩辛い、苦い」という意味があります(古教会スラブ語の syru、ロシア語の syroi「腐った、生の」、リトアニア語の sūras「塩辛い」、sūris「チーズ」なども同源語です)。

5) ◎「糸、植物製の糸状物」の「カナ、*kana, *kan」(日本語方言、アイヌ語、朝鮮語、中国語では「経」)に対する「kane, kanna」(葦、砂糖黍、細い木の茎 ⇒ ? ? *植物の茎、植物の繊維状事物)

■参考：「cane」<https://www.etymonline.com/jp/word/cane>

「cane (n.) 14 世紀後半、「長く細い木の莖」の意味で、古フランス語の cane 「葦、杖、槍」(13 世紀、現代フランス語の canne) から来ており、ラテン語の canna 「葦、杖」、ギリシャ語の kanna から派生したものである。ギリシャ語の kanna は、バビロニア・アッシリアの qanu (ヘブライ語の qaneh、アラビア語の qanah 「葦」に相当) から来ている可能性があり、これはスミア・アッカド語の gin 「葦」から来ているかもしれない。」

6) ◎「川、小川、淡水」の日本語「サワ（サハ）、スワ（スハ）」(沢、諏訪：＜*sapa, *saba, *suba>、および、「シガ、スガ、スゴウ」(氷、氷柱、滋賀、須賀、須郷：＜*sungay, *sungey> に対するサンスクリット語の「srabati (SKT.)」stream)。この事例の場合、b が v に直接つながると思わないし、語形の距離は他の事例に比べてやや遠い。一方、ムンダ諸語の Santali 語に「saba」があり、河川名・水名という最重要語彙でもあるので、注意すべき事例としてここに加えておきたい。

7) ◎「火」の日本語「ホ」[*po]〈ヒ(火)〉、朝鮮語 pul 〈pil〉、オーストロネシア語 *apoi、アイヌ語 ape、アルタイ語祖語 *pore、(中国語「火」) 等に対するインド・ヨーロッパ祖語 *peuōr ～ *pūr (Greenberg, 2002)。

【補注 2】 どのような場合に類型性や言語的類似を持つに至るか、事前にあらゆる可能性を視野に入れる必要がある。

- 1 言語能力を伴う民族の拡散と定着による、ほぼ初期段階的な言語定着。
- 2 (先住人がいる地域への) 移民のような人的移動を伴う言語移入と定着 (例えば現地先住人の規模に匹敵する程度のもの、また、支配階層にはならないような混在の状態など)。
- 3 例えば支配階層など、いわゆる上層語としての優位言語の拡大。
- 4 書記言語、あるいは併用言語 (意志疎通用言語、例えば江戸時代の武士階層における漢文訓読語)、あるいは公用語的地位を得た言語 (例えば第 2 公用語、共通語等) のような、位相的文体的公用語の位置を得た言語等の言語形式の拡大。
- 5 (特に近代以降や戦後における英語のように、多数の人的流入はほぼ伴わずにも起こり得るような) 文化的優位言語、憧憬的地位を得た言語等の、肯定的受容による異言語の特徴の受容 (例えば、翻訳文体的定着、言文一致運動の過程における欧文体受容など)。
- 6 人的交流。文化的交流なども伴う長期におよぶ言語接触による言語的接近 (類似形態化) による類型的言語特性の獲得。
- 7 (その他の可能性)

これらすべてが起こっていた可能性すらある。特に 2～6 は、実際にはそれぞれの性質が重なり合う面が相当にあり得る。一方、現実の局面ではそれぞれ異なる影響を及ぼし得るので (特に語彙レベルでは位相差、文体差も伴いやすいで)、それぞれ原則として区別して考えておくことが、今後の分析には重要になってくると考える。特に、まずこれらの相異を弁別できるだけの資料がどれほど残っているか、そしてまた、弁別し得る方法論を今後どれくらい開発できるかが、課題となる。これらを、文献資料がない時代に遡っても、現実にとのように区別していくことが可能なのか、我々はその方法を見出す段階にまだ至っていないように思われる。

【付記】 本稿は、学習院大学東洋文化研究所 2023-24 年度研究プロジェクトにおけるアジアの河川名をテーマとする研究成果の一部である。関係各位に感謝申し上げます。

【参考文献】

- あべせいや (1997) 『日本語の起源——日本語のルーツを探ったら』アリス館 (本稿はこの研究の延長線上にある)
- ABE, Seiya (1998.7.29・7・28) 'Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects', (Proceedings of 2nd International Congress of Dialectologists & Giolinguists; The International Society for Dialectology and Giolinguistics)
- ABE, Seiya (2003.7.29) 'Dialectal/climatic features and distribution of terms for watercourses in Asian languages: the case of Japanese, Korean, and Chinese, 'Proceedings of XVII, International congress of Linguists' in CD-ROM, Prague, CIL.
- Abe, Seiya (2006) On the "Monsoon Asia Substratum" and Altaic Superstratum in East Asia: A Stratificational Approach to Geolinguistics. In Guido Oebel (ed.), *Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache: Studia Iaponica Wolfgang Viereck emerito oblate* [The Festschrift for Doc. Wolfgang Viereck, 79-96. LINCOM GmbH, Muenchen, Deutschland.
- ABE, Seiya (2025) The Classification and Division of Japanese Dialects, *The Handbook of Japanese Dialects*, Kibe, Nitta and Sasaki edit., De Gruyter Mouton.
- Blust, Robert and Stephen Trussel (2010) *Austronesian Comparative Dictionary*, Web Edition. <http://www.trussel2.com/ACD/> [accessed May 2024]

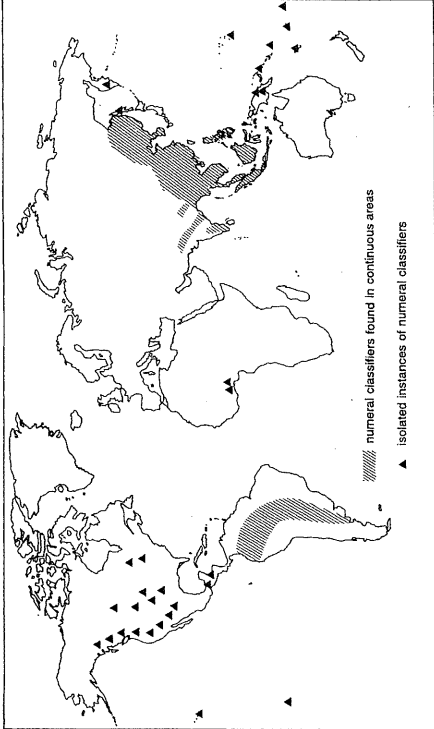
- Krahe (1954) 『SPRACHE UND VORZEIT』(『言語と先史時代』)
W. W. Hunter (1868, rep. 1978) A Comparative Dictionary of the Languages of India and High Asia
- 安部清哉 (2000) 「日本語史研究の一視点——方言国語史の観点から——」『国語論究 8 国語史の新視点』明治書院
- 安部清哉 (2000.1) 「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』65-1 (824) 至文堂
- 安部清哉 (2001.8) 「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本学会（KAJA）第63回學術大會 Proceedings』
- 安部清哉 (2001.11) 「東アジア（日本語・韓国語・中国語）の河川名の偏在と方言分布・気候との相関 配布地図・補論」『玉藻』37
- 安部清哉 (2002.5) 「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”——」『方言地理学の課題（グロートース神父記念論集）』明治書院
- 安部清哉編 (2003.3) 『日本語の方言分布境界線（関越線・気候線）による方言の重層性に関する基礎的研究』平成13・14年度科学研究費成果報告書、私家版
- 安部清哉 (2003.7) 「関東における日本語方言境界線から見た河川名の重層とその背景」『国語学』54-3
- 安部清哉 (2004.7) 「地名と日本語——河川名の言語空間」『国文学解釈と鑑賞』69-7
- 安部清哉 (2004.7.10) 「日本語の境界とモンスーン・アジアという世界——水源地形名 numa < *nub (沼・泥) の言語分布——」『韓国日本学連合会第2回国際学術大会 Proceedings』
- 安部清哉 (2008) 「アジアの中の日本語」小林隆編『シリーズ方言学 1 方言の形成』岩波書店、123-167.
- 安部清哉 (2011) 「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立——「五味」とスイ・スッパバイ・スッカイの語源（中国語「酢」の再検討——）『人文』9
- 安部清哉 (2014) 「方言区画論と方言境界線と方言圏の比較研究」『人文』13、21-55.
- 安部清哉 (2014.3b) 「日本語の『南北型方言分布』研究のための言語地図一覧」『文学部研究年報』60、pp. 21-79.
- 安部清哉 (2023) 「日本語方言における種の「方言圏」の課題：方言境界線の類型とアクセント分布との相関性」『文学部研究年報』69、pp. 39-81.
- 安部清哉 (2025.3a) 「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言におけるある種の音韻対応 [k・x-p] < [*kʷ]」『人文』23.

- 安部清哉 (2025.3b) 「水名（河川名）「サワ」(沢)「シガ」(水)小考」『学習院大学国語国文学会誌』68.
- 安部清哉 (2025.3c) 「日本語の河川名（水名）の重層的形成とモンスーン・アジア最古基層（副題略）」『文学部研究年報』71（本稿）
- 泉井久之助 1953 (1952?) 『民族学研究』17-2、いま泉井 1985 による。
- 泉井久之助 1985 「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」『日本語の系統・基本論文集 1』和泉書院
- 板橋義三 (2001) 「アルタイ諸言語（含朝鮮語）と日本語」『言語研究』120
- 大野晋 (1962) 『万葉集四』日本古典文学大系、岩波書店
- 大野晋 (1980) 『日本語の世界 1 日本語の成立』中央公論社
- 大野晋 (2002) 『日本語はいかにして成立したか』中公文庫
- 奥里将建 (1943) 『古代語新論』三省堂、pp. 485 と村山 1975 に引かれる。
- 落合いずみ (2024) 「アイヌ祖語における「川」の再建—アイヌ語地名「十勝」「空知」の由来とともに—」『言語記述論集』16.
- 落合いずみ (2024) “River” in Atayalic and “fresh water” in Proto-Austronesian, *Journal of the Center for Northern Humanities*, 17
- 鐘味明克 (1977) 「地名の起源」『岩波講座日本語 12』岩波書店
- 鐘味完二 (1958) 『日本地名学』東洋書林原書房
- 鐘味完二 (1958) 『日本地名学 地図篇』日本地名学研究所（地名地図はこれによる）
- 亀井孝 (1954) 『ツル』と『イト』『国語学』16、初出英文論文は 1953
- 川本崇雄 (1993) 「日本語・オーストロネシア語比較語彙表 (4)」『英語英文学研究』32、創価大学英語英文学会。
- 佐竹昭広 (1955) 「古代日本語の色名の性格」『国語国文』24-6
- 新村 出 (1916) 「国語および朝鮮語の数詞について（承前）」『芸文』7-4
- 鈴木秀夫 (1987) 「民族の移動と言語の分布」『言語』16-7 と氏の先行論文
- 宋 敏 (1999) 『韓国語と日本語のあいだ』草風館
- 竹岡俊樹 (1991) 「旧石器時代の石器分析からみた左右差の起源と発展」『左右差の起源と脳』朝倉出版
- 郡 守照 (1977) 『百済語研究』亜細亜文化社
- 郡竹通年雄 (1953) 「巻十四の『中麻奈』」『万葉』9
- 永田高志 (2000) 「方言に見る第三者に対する待遇表現」『20 世紀のフィールド言語学の軌跡』
- 橋本満太郎 (1978) 『言語類型地理論』弘文堂
- 朴 炳采 (1968) 「古代三国の地名語彙攷（副題略）」『白山学報』5
- Masica, Colin P., (1976), *Defining a Linguistic Area: South Asia*, The

- University of Chicago Press, Chicago and London.
- 松本克己 (2007) 『世界言語のなかの日本語』三省堂
- 村山七郎 (1975) 『国語学の限界』弘文堂
- 村山七郎 (1978) 『日本語系統の探求』大修館書店
- 山本秀樹 (1996) 『世界諸言語の語順類型論地図』『月刊言語』25-2.
- 山本秀樹 (2003) 『世界諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』淡水社
- 李 基文 (1975) 『韓国語の歴史』大修館書店
- 李 芳漢 (1983) 『韓国語の系統』三一書房（原書は韓国）
- 【文化人類学関係】
- 今村啓爾 (1999) 『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
- 江坂輝彊 (1965) 『縄文時代の生活と社会——生活の舞台』『日本の考古学Ⅱ 縄文時代』河出書房新社、江坂 1943・1954 等もあるが省略。
- 大林太良 (1961) 『日本神話の起源』角川書店
- 大林太良 (1975) 『神話と神話学』大和書房
- 大林太良 (1979) 『神話の話』講談社学術文庫
- 大林太良 (1986) 『東アジアの文化領域論』埴原和郎編『日本人の起源』小学館
- 大林太良 (1996) 『神話学入門』中公新書
- 京都大学グローバルCOEプログラム・パンフレット「Focus 特集『講座 生存基盤論』全6巻の概要」
- 大林太良 (1999) 『銀河の道 虹の架け橋』小学館
- オッペンハイマー、Stephan, Oppenheimer (2007) 『人類の足跡の10万年全史』草思社（“Out of Eden: the peopling of the world” 2003）
- 片山一博 (1996) 『アメリカ大陸とオセアニアへの拡散』『人類史をたどる』朝倉書店
- 北村四郎 (1957) 『植物の分布』『原色日本植物図鑑草木編 [11]』保育社
- 後藤明 (2002) 『南島の神話』中央公論社
- 後藤明 (2017) 『世界神話学入門』講談社現代新書
- 鈴木秀夫 (1978) 『森林の思考・砂漠の思考』日本放送出版協会
- 樋泉岳二 (1999) 『東京湾地域における完新世の海洋環境変遷と縄文貝塚形成史』『国立歴史民族博物館研究報告』81
- 中尾佐助 (1966) 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店
- 中尾佐助 (1967) 『農業起源論』『自然——生態学的研究』中央公論社
- 新妻信明 (1991) 『丹沢の衝突』『南の海からきた丹沢』有隣堂、柏崎一銈子総掲載
- 西光義弘 (2001.6.9) 『類別詞の理論的考察』（文部省科学研究費特定領域研究（A）公開講演会「消滅に瀕した言語」発表資料）

- ダーリントン、Philip J. Darlington, JR., 1966, *Zoogeography: the Geographical Distribution of Animals*, Harvard Univ., Museum of Comparative Zoology, JOHN WILEY & SONS, INC., London, New York, Sydney.
- 高柳謙治 (1986) 『日本人とさといも』『日本人のための生活資源のルーツを探る』筑波書房
- 根本順吉・倉嶋厚・吉野正敏・沼田眞編 (1959) 『季節風』地人書館
- バウマン、Bumann, Hermann, 1955, *Das doppelte Geschlecht*, Dietrich Reimer, Berlin.
- 春成秀爾・小池裕子 (1987) 『1/400 万先史遺跡・環境図解説』『日本第四紀地図』東京大学出版会
- 堀田 満 (1974) 『植物の分布と分化』三省堂
- 堀田 満 (1983) 『イモ型有用植物の起源と系統——東アジアを中心に——』佐々木高明編『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会
- 前川文夫 (1977) 『日本の植物区系』玉川大学出版部
- 森脇和郎・米川博通 (1993) 『遺伝子から見たアジア産ハツカネズミ亜種の分化と分布』『日本人と日本文化の形成』朝倉書店
- 山口晶子 (1995) 『日本と周辺アジアの伝統的船舶——その文化地理学的研究——』文献出版
- ユーリ・ペリョースキン (2012) 『環太平洋における日本神話モチーフの分布』『古事記 環太平洋の日本神話』（アジア遊学 158）勉誠出版
- 吉野正敏 (1999) 『モンスーンアジアの環境変化と稲作社会（副題略）』『地理学評論』72A-9
- R. ルーウィン (2002) 『ここまでわかった人類の起源と進化』てらべいあ

図 1-① Distribution of Numeral Classifiers by Aikhenvald 2000, 「類別詞」の分布領域



Map. 1 *Distribution of numeral classifiers in the languages of the world*
Alexandra Y. Aikhenvald (2000)

図 1-② 「類別詞」(Aikhenvald2000) の図を太平洋を中心に改編した図
(安部 (2025) 版)

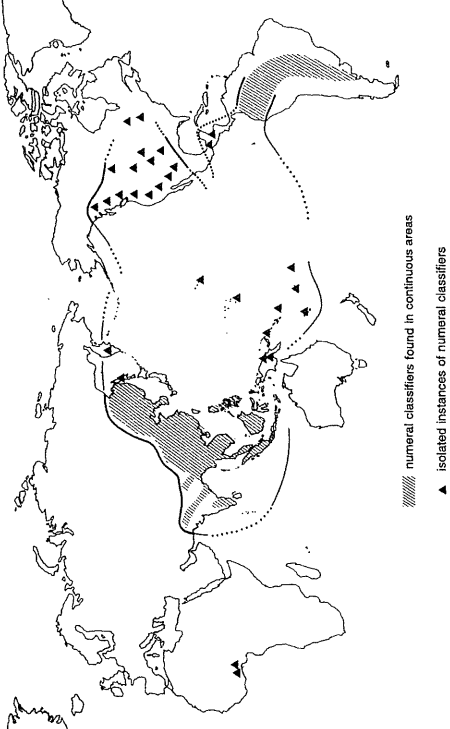


図 2-① モンスーン・アジア (MA) の領域 (安部 2003.7)
(アルタイ語圏と重複する領域に注意)

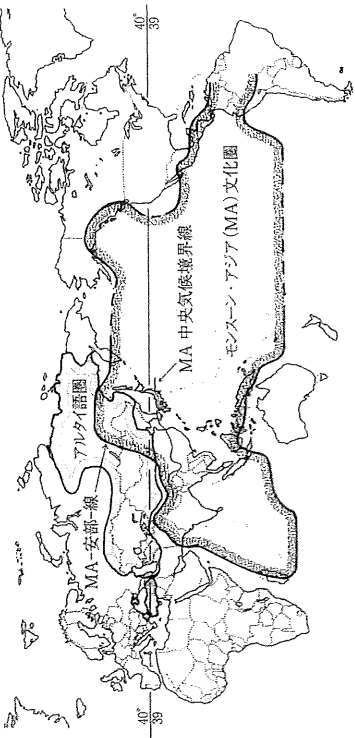
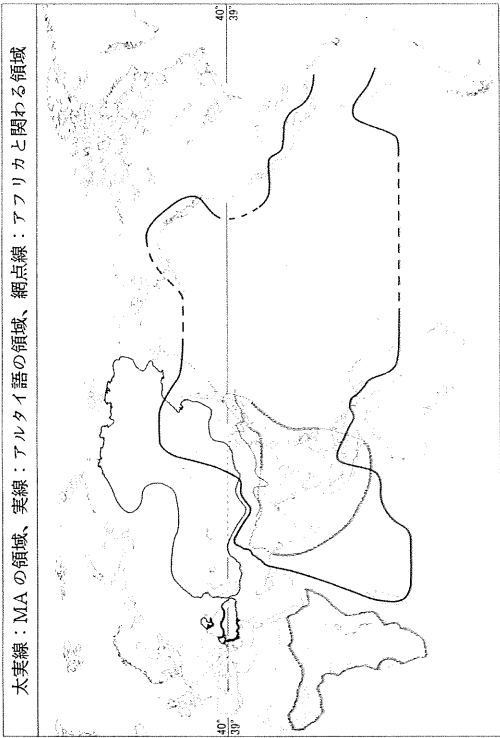


図 2-② Monsoon Asia Cultural Sphere (M.A.C.A.) の概念図 (MA の領域内で
アフリカと関わる領域を網点線で示した。安部 (2025)



(アフリカと関わる領域は図 18、図 19 を参照) 安部 (2025)

日本語の河川名 (水名) の重層的形成とモンスーン・アジア最古基層 (安部)

図 2-③ モンスーン・アジアの領域とオーストロネシア語の拡散範囲 (安部 (2025:3c))。

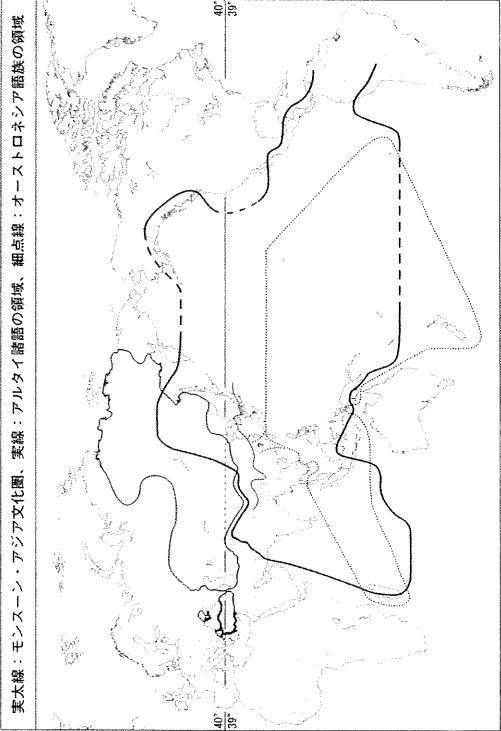
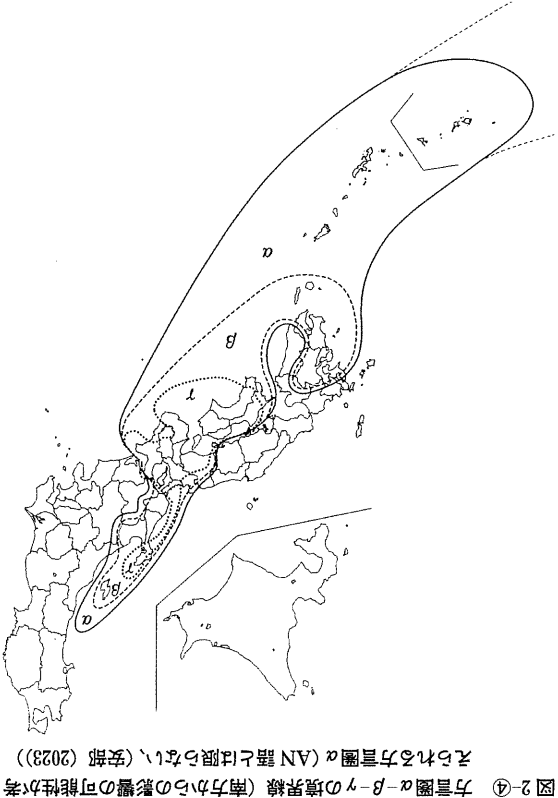


図 2-④ 方言圏 α - β - γ の境界線 (南方からの影響の可能性が考えられる方言圏 α (AN 語とは限らない、(安部 (2023))

日本語の河川名 (水名) の重層的形成とモンスーン・アジア最古基層 (安部)

図 3 母音の数

Feature 2A: Vowel Quality Inventories

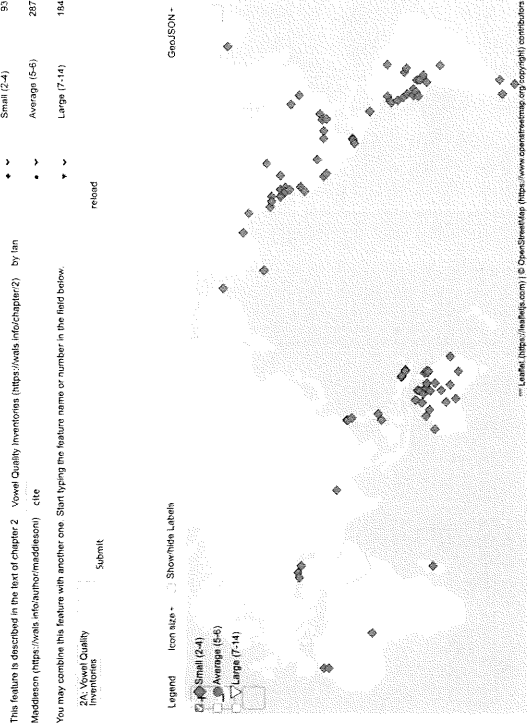


図 4 有声化 Feature 4A: Voicing in Plosives and Fricative

Feature 4A: Voicing in Plosives and Fricatives

This feature is described in the text of chapter 4 Voicing in Plosives and Fricatives (https://wais.info/chapter/4) by Ian Maddieson (https://wais.info/author/iannmaddieson/)

cite

You may combine this feature with another one. Start typing the feature name or number in the field below.

4A: Voicing in Plosives and Fricatives

No voicing contrast

192

In plosives alone

110

In fricatives alone

30

In both plosives and fricatives

158

Submit

reload

Legend

Icon size

Show/Hide Labels

☒ 4A: No voicing contrast

☐ In plosives alone

☐ In fricatives alone

☐ In both plosives and fricatives

GeoJSON

105

日本語の河川名 (水名) の重層的形成とモンスーン・アジア最古基層 (安部)

図 5 待遇表現

Feature 45A: Politeness Distinctions in Pronouns

This feature is described in the text of chapter 45 Politeness Distinctions in Pronouns (https://wais.info/chapter/45) by Johannes Heintzsch (https://wais.info/author/heintzsch/)

cite

You may combine this feature with another one. Start typing the feature name or number in the field below.

45A: Politeness Distinctions in Pronouns

No politeness distinction

136

Binary politeness distinction

49

Multiple politeness distinctions

15

Pronouns avoided for politeness

7

Submit

reload

Legend

Icon size

Show/Hide Labels

☒ 45A: No politeness distinction

☐ Binary politeness distinction

☐ Multiple politeness distinctions

☐ Pronouns avoided for politeness

GeoJSON

106

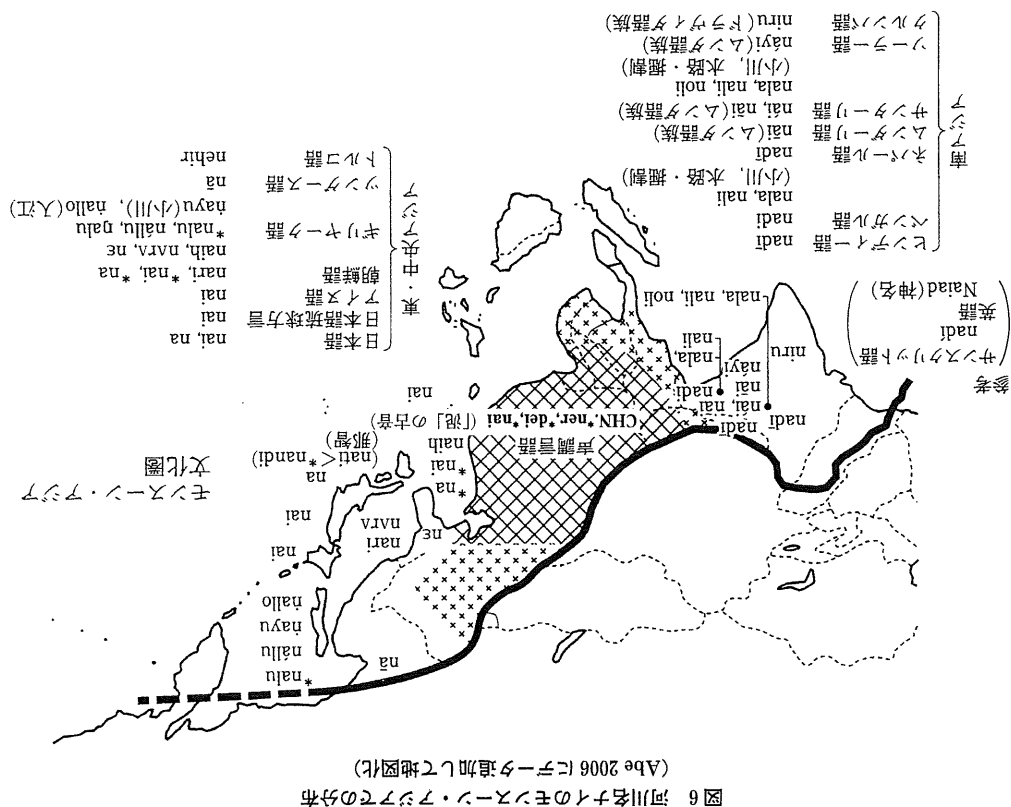
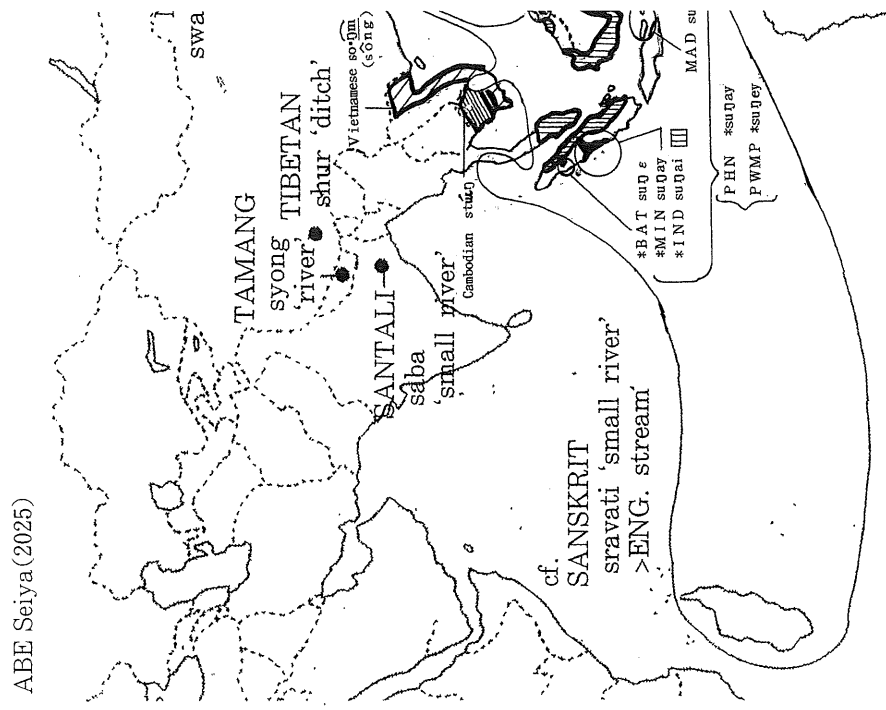


図7 「川 (小川・沢) : サワの言語地図」
Distribution of *sawa ~ *sunay as 'small river' 小川 in Monsoon Asia ABE



(安部 2004.12. の図に加筆)

Seiya (2004.7)

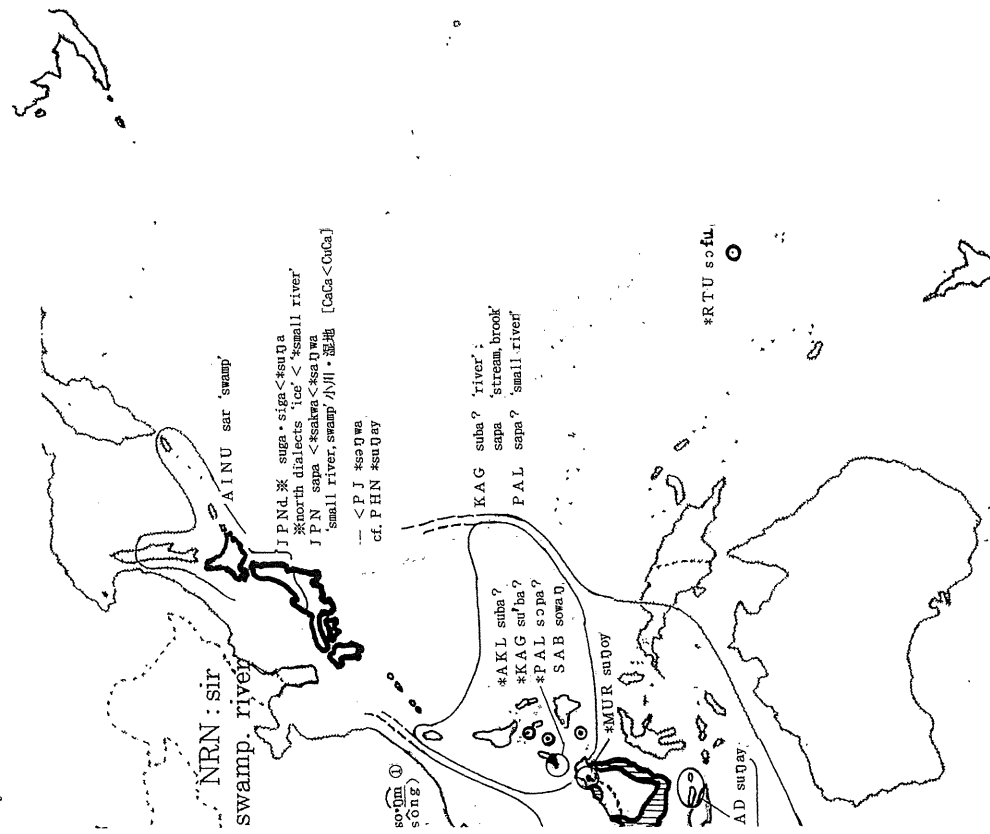
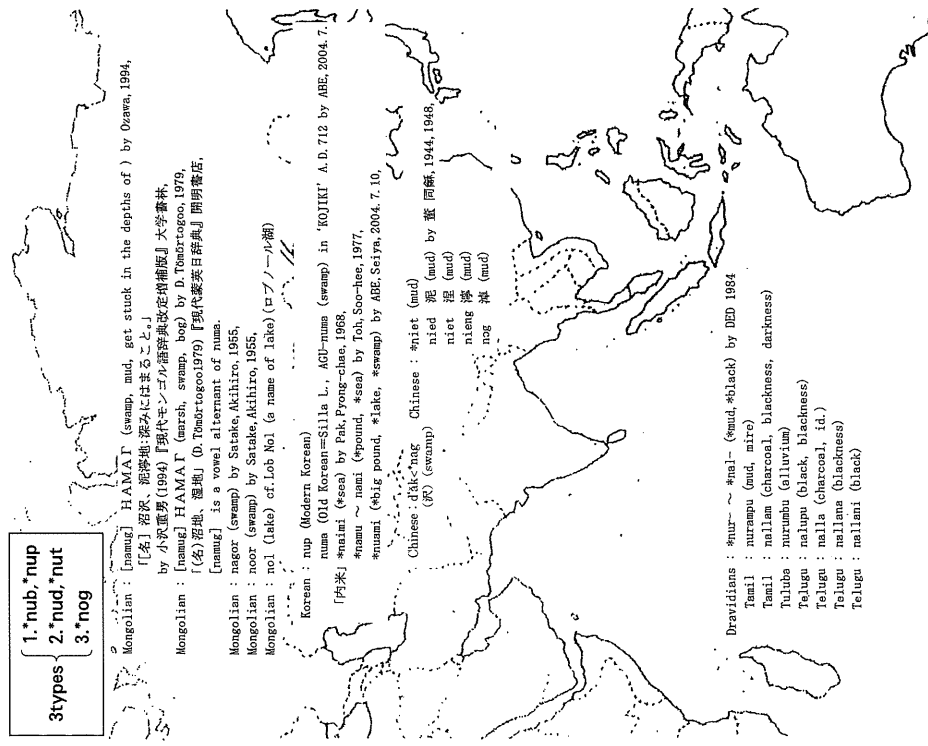
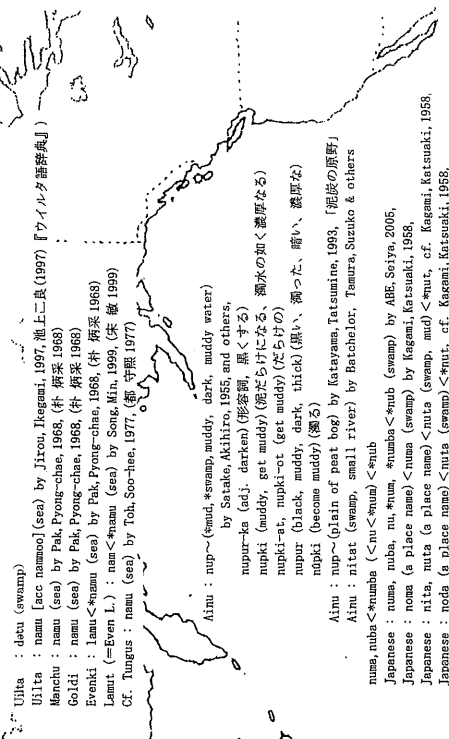


図 8 「沼 (泥・黒) :ヌマ・ヌバ



の言語地図 (安部 2000 を地図化)

Map The Distribution of *nub (swamp) by ABE, Seiya, 2005, in Monsoon Asia Cultural Region 1-3 330-331 (cf. Abe 2004, 7.10)
※(*mud, *swamp, muddy, *dark, *muddy water)



Chinese : *net (mud)
ner 泥 (mud) by Tohdoh, Akiyoshi
net 泥 (mud)
nei 泥 (mud)
nog 泥 (mud)

[m-d] alternant of *nam & *nab
Tibetan : dam [dam] (marsh) by Kitamura & Nagano, 1990, (沼地)
Tibetan : dzab [dzab] (mud) by Kitamura & Nagano, 1990, (泥)
Tibetan : lob < *lob (mud) cf. Lob Nal (a name of lake) (ロブナル湖)
Tibetan : nago ~ nago [nag bo] (darker, darkness) by Kitamura & Nagano, 1990,
北村清・斎藤泰彦 (1990) 『現代チベット語分辞典』 汲古書院
A Classified Lexicon of Modern Tibetan by Hajime Kitamura and Yasuhiko Nagano, 1990,
namu > namu > nam > dam > *dab > *dzab > dzab (rdzab)

★ Munda : mudi (dark) 『Mundari-English Dictionary』
Thai : n'oo (swamp) by Tomita, Takejiro, 1975, 『タイ一日・日・タイ小辞典』
(cf. Uti, Seiji, 2004, 『タイ一日・日・タイ英辞典』 三省堂),
Thai : nam (water, liquid, river) by Matsuyama & Salomoto, 1978,
松山祐・坂本比奈子 1978 『タイ語基礎 1500 語』 大修館書店

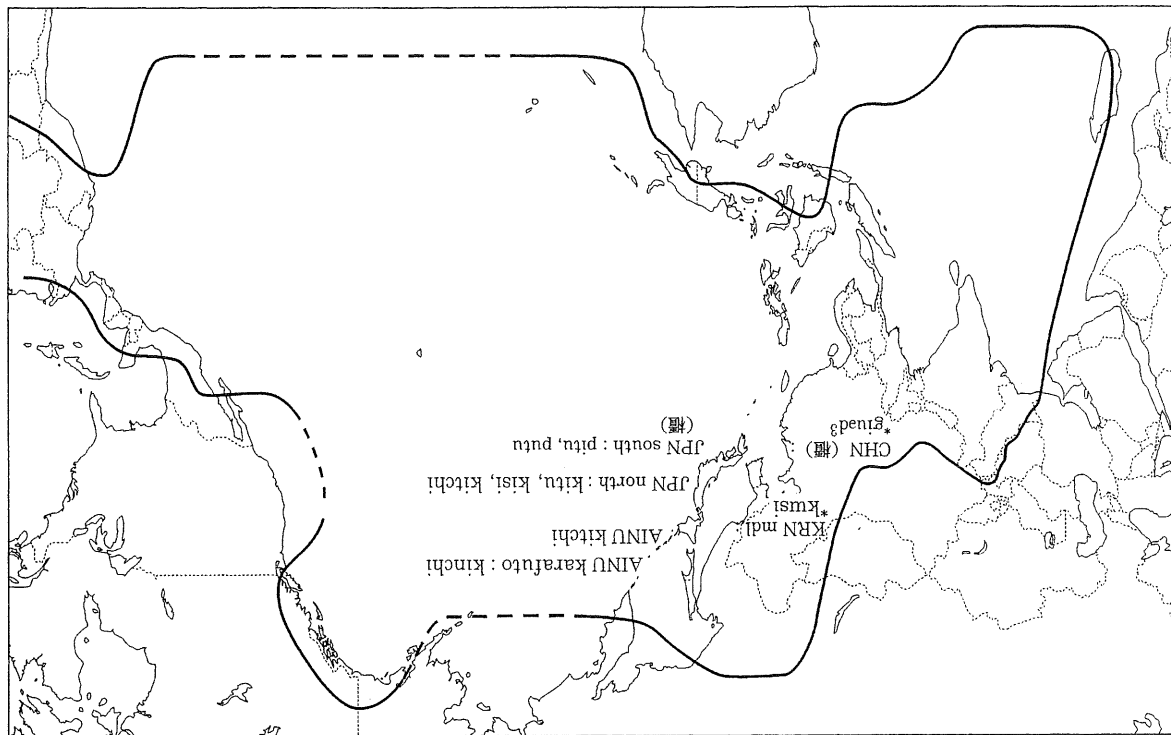


図 9 「木桶 (桶) : ビツ・キツの言語地図 (安部 2009.3. を地図化) "git, Kit ~ "bit, pit (k-p alternation) as for "pail, bucket, tub made of wood" (桶) in Monsoon Asia

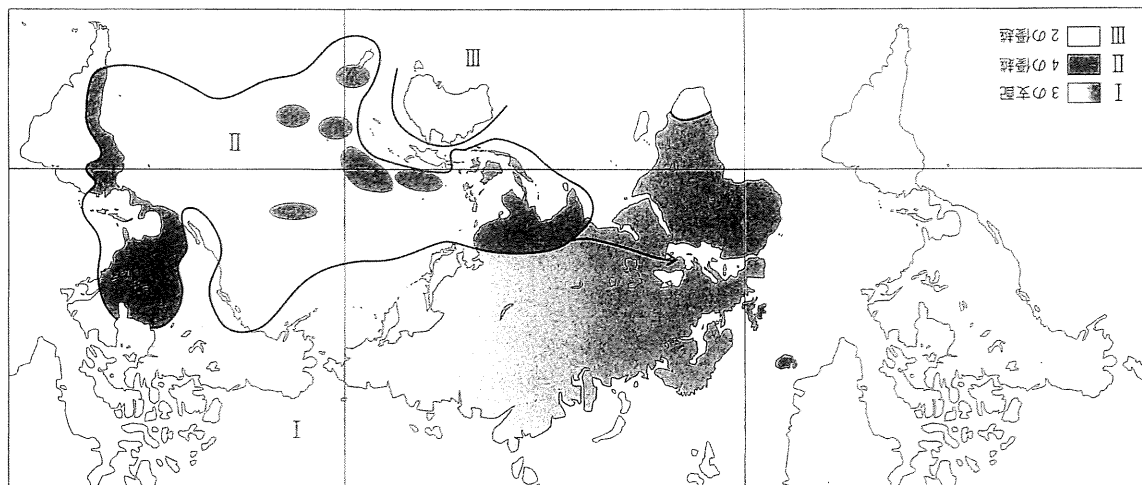


図 11 原数の分布 I = 3の支配、II = 4の優越、III = 2の優越 (Frobenius 1929: 327) (大林太良 (1999))

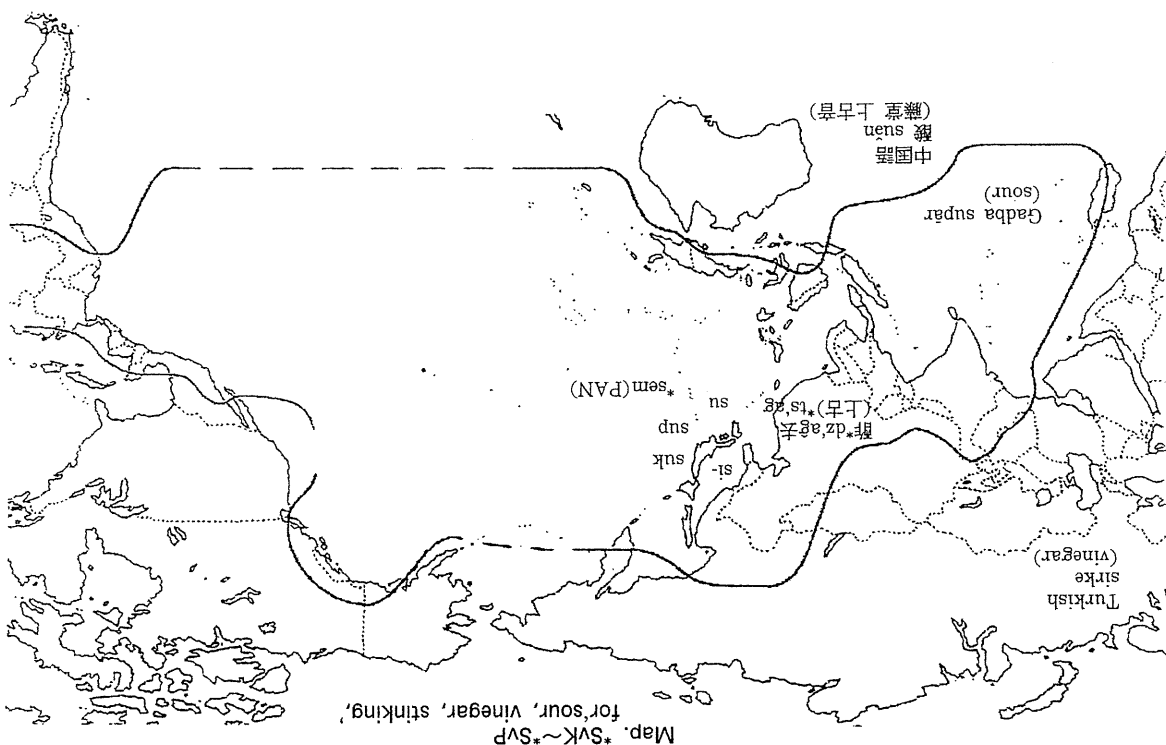
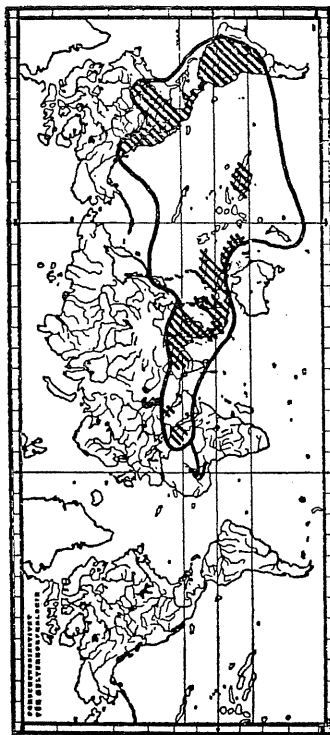


図 10 「酸味：スッパの言語地図」(安部 2007.3b を地図化)

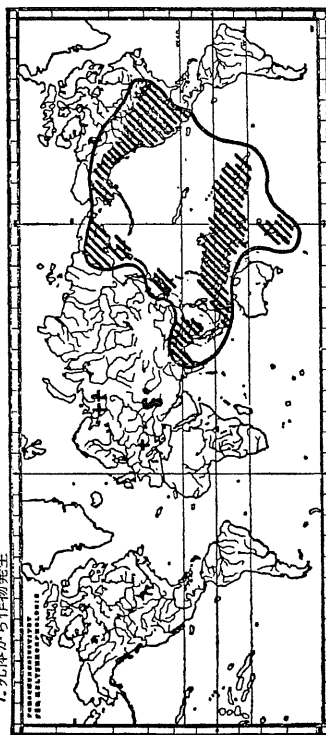
図 11 のフロベニウスの「原数の分布」で「4の優越」領域に中国、日本が入っていないが、中国語では「四大」「四方」「四周」等にて外世界全体を表現する熟語がある。日本語の基本語彙（色彩、味覚、温度形容語他、安部 (2011) 参照）には4語によって五感の世界を田の字の十字構造的に四分するという基本概念構造が認められる。これら「4」の優位概念をもとにその倍数の「8進法」が形成され、その一部の地域では「8の聖数」、觀念（最大数、無限数、特殊数）の母胎となった（特に太平洋地域に8進法例が多い。大野晋 (1980) 参照）。日本語の「八雲」「八百万の神」「八岐大蛇」等にある聖数8と、数詞「八、ミ、ム、ヨ、ヤ」（1-2, 3-6, 4-8 = pi-pu, mi-mu, yo-ya）の倍進法（8が最大値）とは、やがて大陸側からの文字を伴った「10」進法世界の「数の文化」を受け入れることとなり（図 41, 42, 43）も参照）。それを持ち込んだ言語の優勢だったものから、3, 5, 7, 10などの数詞を借り入れて（新村出 (1916) ほか）同源の同音語として残ることとなった。8に続く不足している9, 10の数は多音節語形となった。原数と聖数の4-8の語源が現在も未詳・未確定なのはより古い、重要で強固な形態を留めたためか（1-2, 3-6での対母音i-uとは異なるo-aであるのもその故か）。

図 12 フロベニウスの神話分布図 (20 図) (大林太良 (1975))

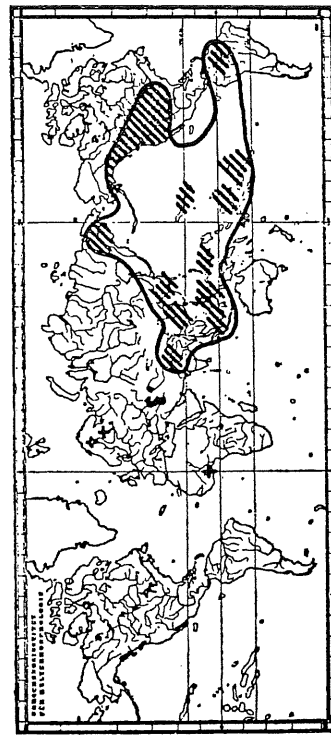




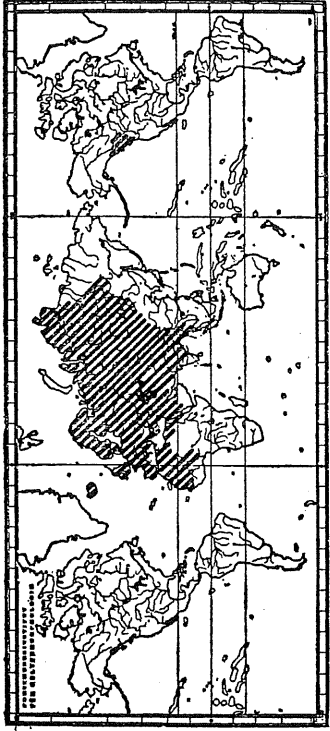
7. 死体から作物発生



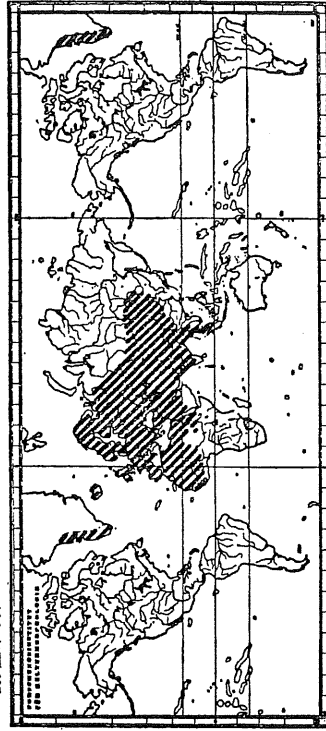
8. /// 水影から魚(および鰐)発生
十 ユクラ族とハンガリーにおける放射



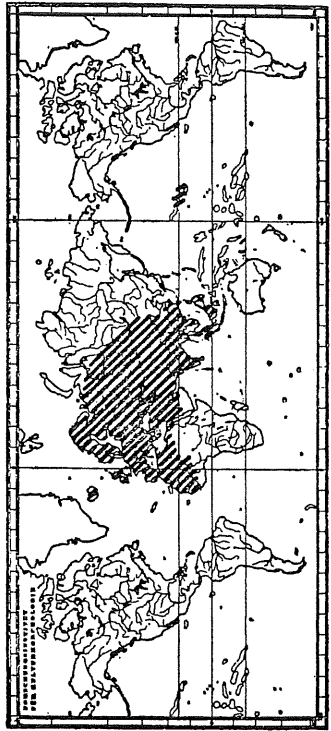
9. /// 釣られた少女
十 放 射



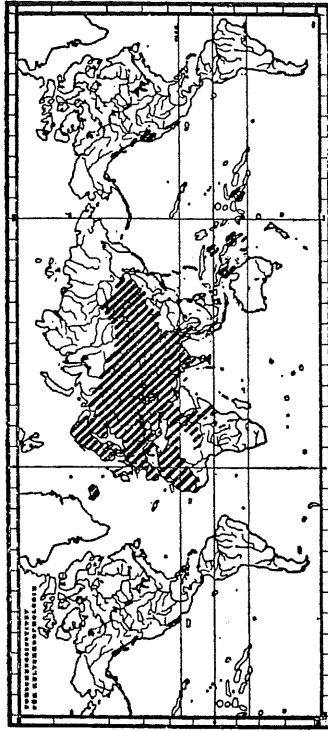
10. 生命の卵



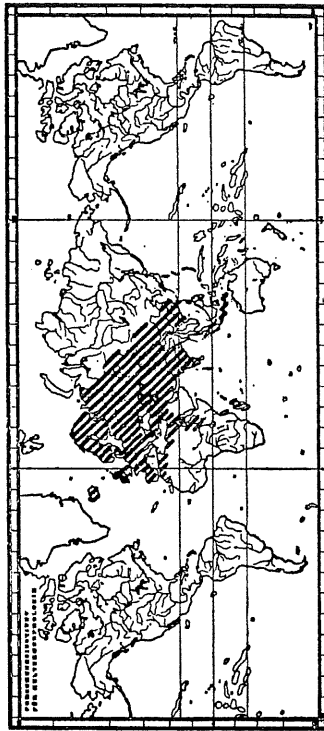
11. 動物が秘密を知っている



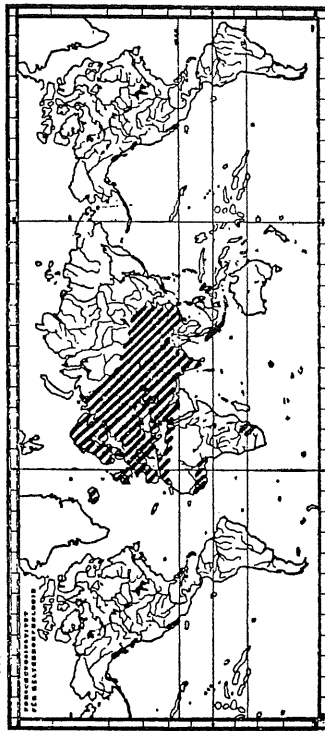
12. 旅の道づれ



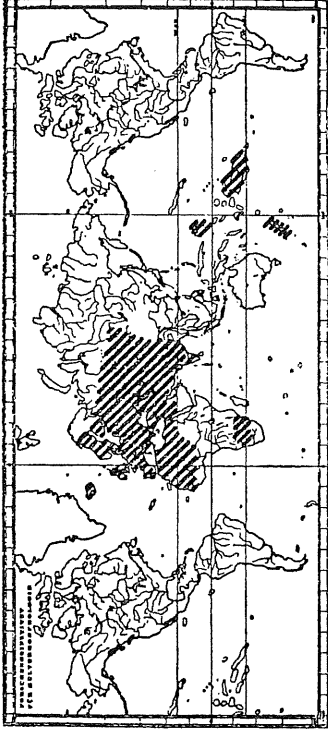
13. 見映えのせぬ騎士



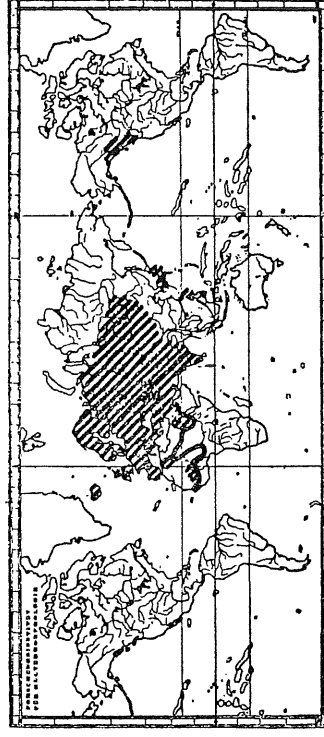
14. 井戸の旅



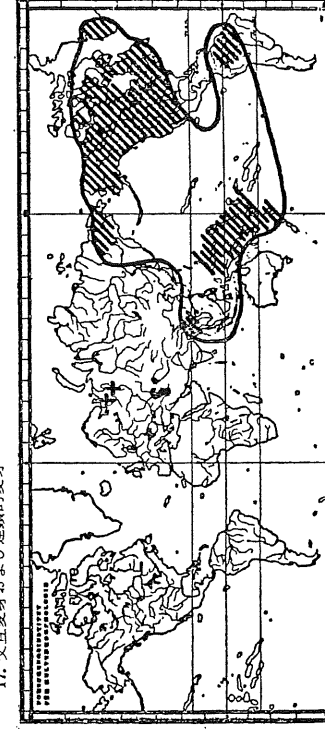
15. 魔法の食卓など、奇蹟の事柄(集団的)



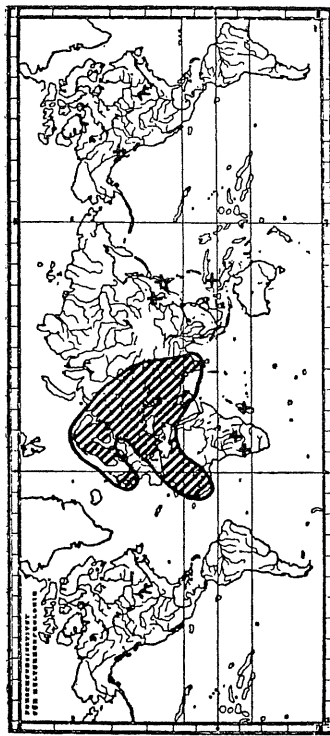
16. <開け胡蝶>



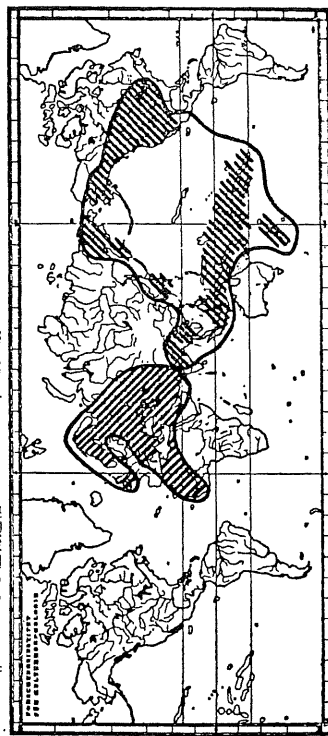
17. 交互変身および連鎖的変身



18. /// 焼石による怪物退治
十放 射



19. 川 焼鉄による怪物退治 十放 射



20. 川 焼鉄 川 焼石

図 13-① 「神の体から生ずる有用植物」神話の分布（フロベニウス原図）（後藤明（2002））

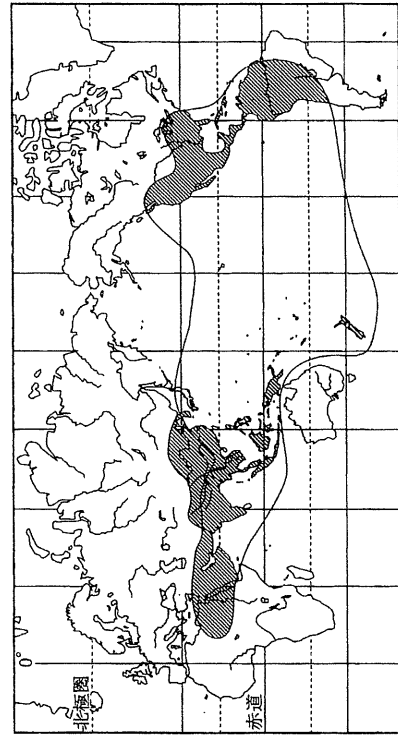
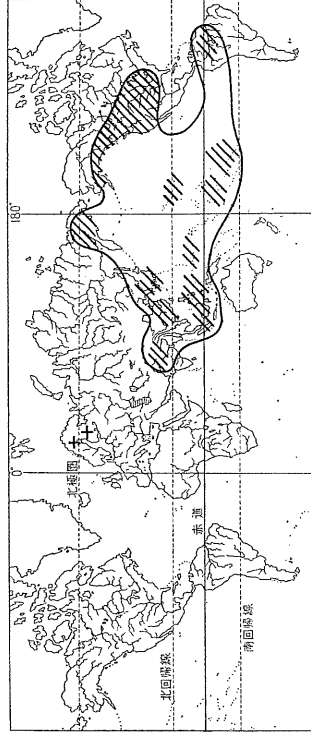


図 13-② 失われた釣針（フロベニウス原図）（大林太良（1961））



失われた釣針 英雄が釣針を失ってしまふ。その釣針を捜しに行つて、海の下の人間のあごのなかに釣針をみつけ出し、海中の少女と結婚するといふ筋で、日本のトヨタヒメ神話もその一つである。図中で十字をつけたところは、この神話が波及した痕跡が残っているところである。斜線はその分布（フロベニウス原図）

図 13-③ ヨナ型説話の分布（フロベニウス原図）（大林太良（1979））

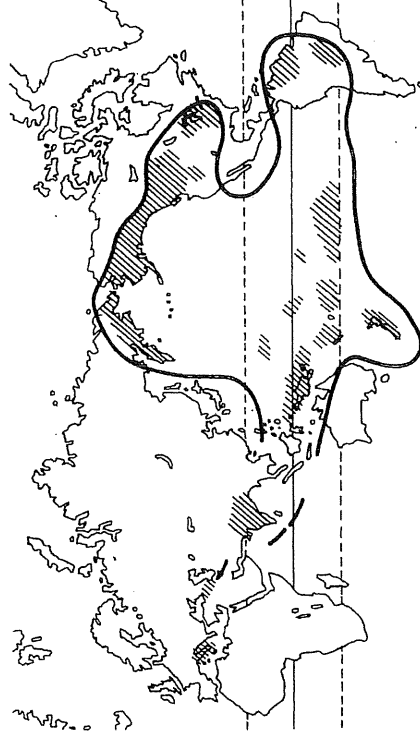


図 14-① 天父地母神話の分布：イザナキ、イザナミの神話は天父地母の神話である。天父地母の神話は、古代文明とその影響圏に広く分布している。（バウマン 原図）（大林太良（1961）での解説より）（図は Baumann（1955））

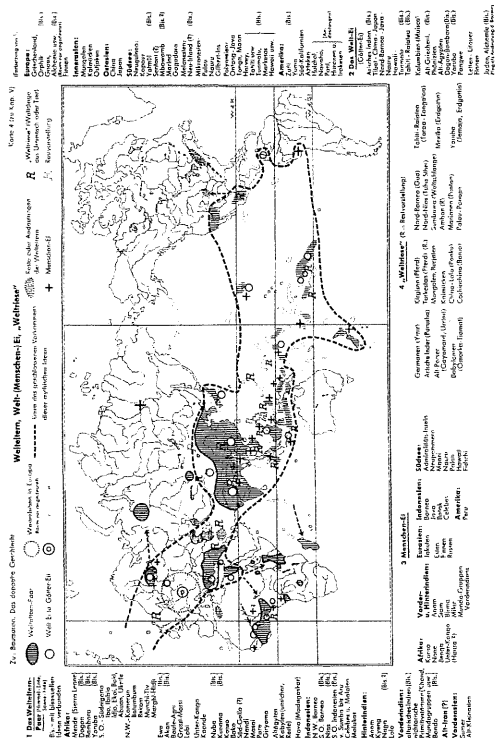


図 14-② 天父地母、宇宙卵、人類卵、世界巨人の分布（バウマン原図）（大林太良（1996）での略図）

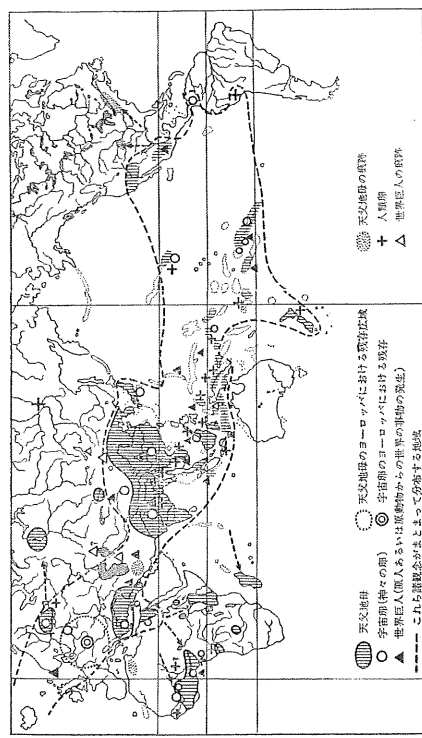


図 15 大地が水上に落ちる。（ユーリ・ペリョースキン（2012））
（1）初めは大地と水だけがあった。人が天から降り、乾いた土地を創る。または彼女/彼のために創られた堅固な支えが大地になる。または大地は天から落とされるか、水面上に置かれる。または大地はどこからか（下界からではない）もたらされ水面上に置かれる。（2）同様、原初海洋ではなく池沼または、特定されない深淵。（ユーリ・ペリョースキン（2012））

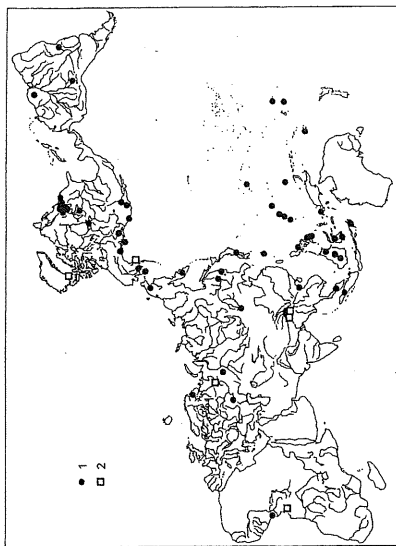


図 16 「見えない釣針」型説話の分布（ペリョースキン原図、Berezkin（2012））
（1）見えない釣針。男が釣針か鉤で漁労、または別の物を投げてそれが動物か人にぶつかる。負傷者はその体に男の投射物をつけたまま泳ぎ去る、または逃走。その地の医者たちには投射物が見えず、傷を治せない。男またはその友が負傷者の住む所へ来て、投射物を取り出し、傷を治す。（2）失われた物が戻る。人が物を借り、それを失う。所有者は彼/彼女の物を返すよう主張。物をなくした人は他界からそれを取り戻す。（3）両モチーフの結合。（ユーリ・ペリョースキン（2012））

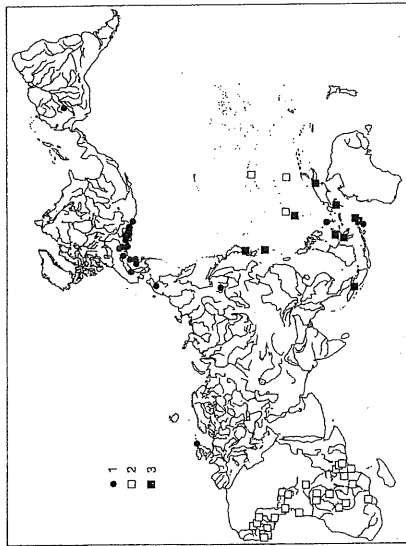


図17 旧石器時代の石器分布——東西分布および東洋の「非両面加工石器」の分布（ルーウィン 2002）（矢印と境界線を加筆）

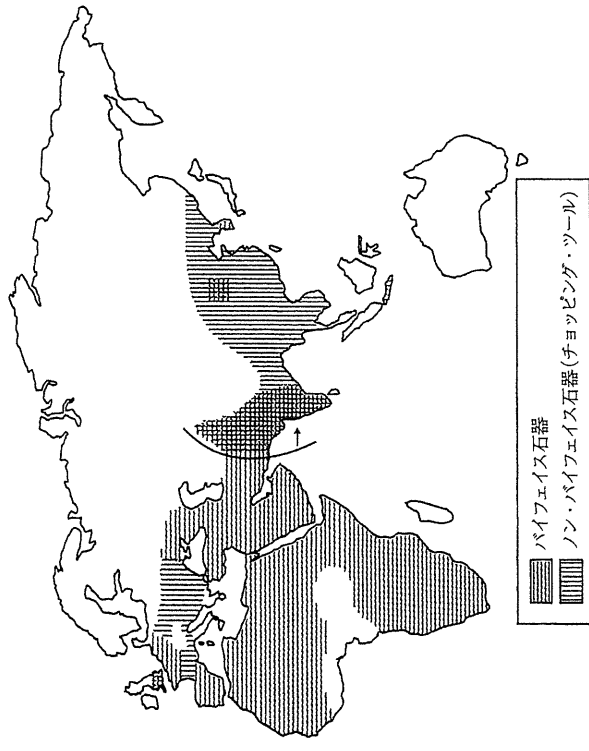
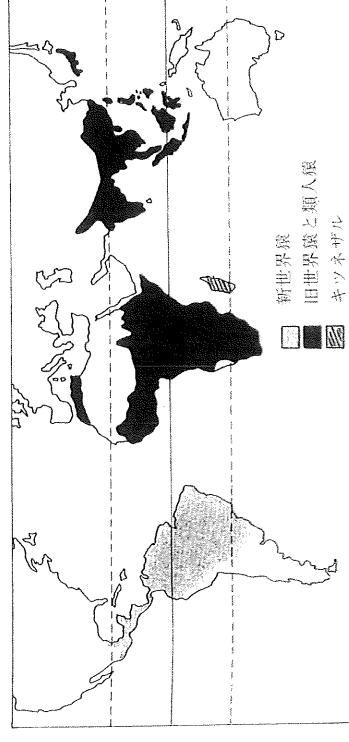


図18 現生霊長類の地理的分布（MA 領域とアフリカとの関連を示す分布図）

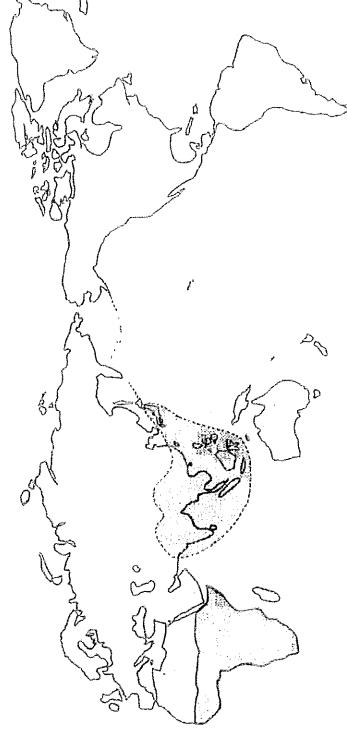


R. ルーウィン（保志宏訳）（2002.1）『ここまですわかった人類の起源と進化』てらべ
いあ（人間科学全書テキストブックシリーズ7）

図19 霊長類における類似ウイルスの地理的分布

（MA 領域とアフリカとの関連を示す分布図）

Stephan, Oppenheimer（2007）『人類の足跡の10万年全史』草思社（“Out of
Eden: the peopling of the world” 2003）



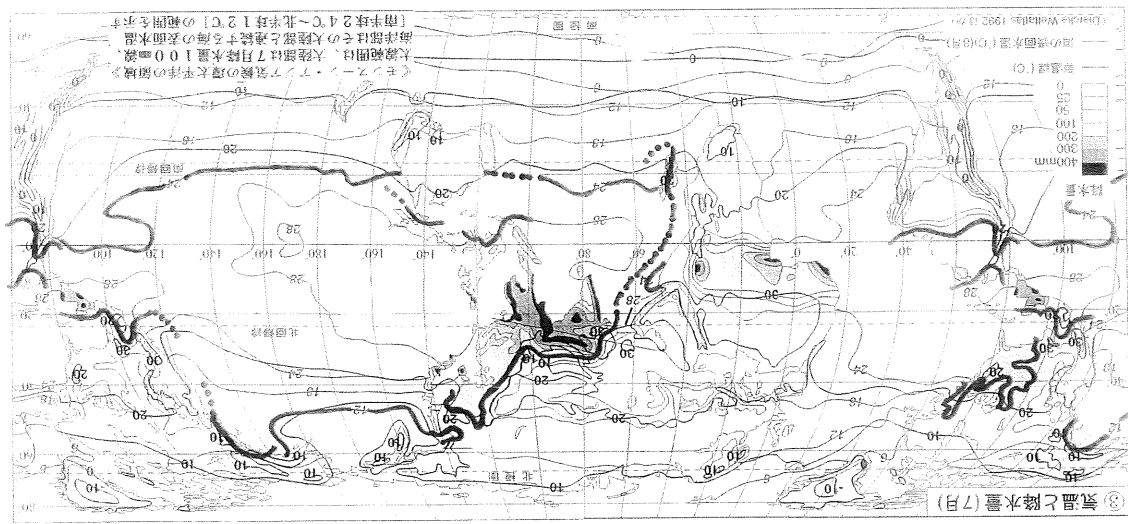


図20 モンスーン・アジア気候の領域 (対照 2004・12) (右下の説明参照)
気候地図は『詳解現代地図 2000-2001』(2001) 二時書店より

図21 Monsoon Asia Area, (Yoshino (1999))

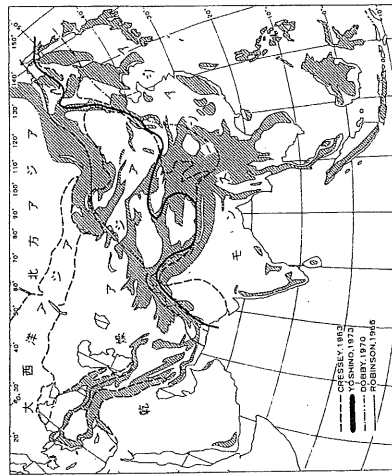


図1 モンスーンアジアの範囲

Cressey (1963) の原図に、Robinson (1966), Dobby (1970), 吉野 (1973) による限界線を記入。

(Fig. 1 Regions of Monsoon Asia delimited by Cressey (1963), Robinson (1966), Dobby (1970), and Yoshino (1973))

図22 夏の季節風のおよぶ範囲 (小泉武栄ほか著 (2002) 『新しい社会科地図』)

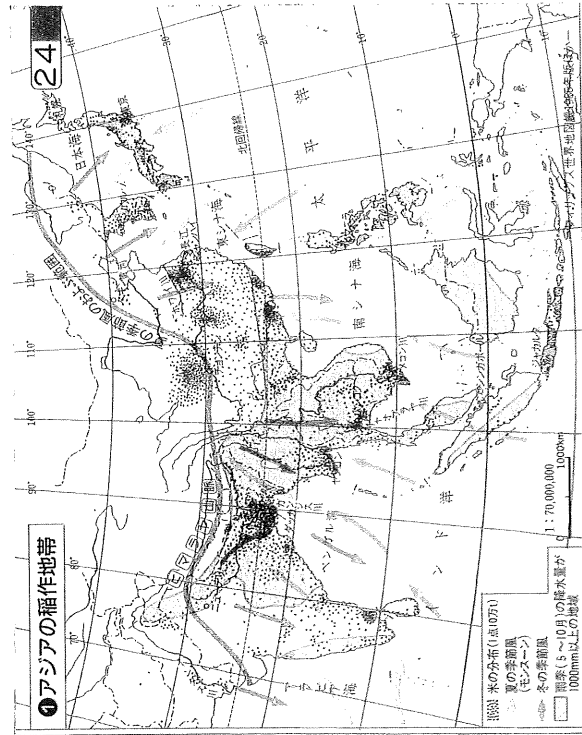
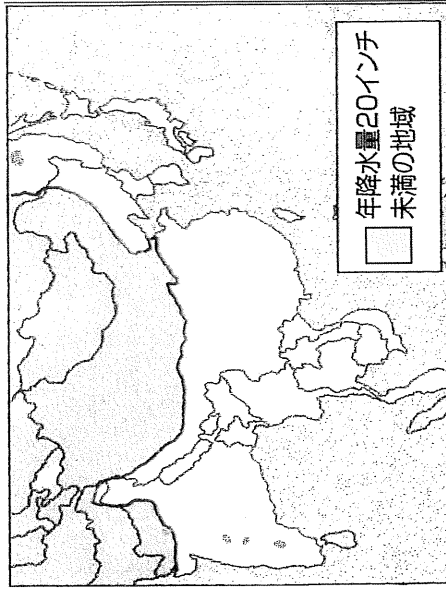
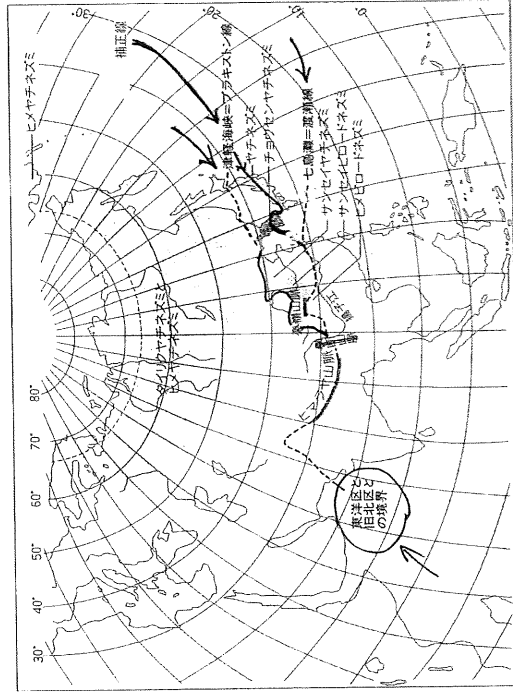


図23 年間降水量20インチ以上・未満の地域の境界線



Kenneth Pomeranz, "The Great Himalayan Watershed," *New Left Review*, 56, July-August 2009, p. 6 より翻訳・改変
京都大学グローバルCOEプログラム 生基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点

図24 動物分布 東洋界と古北界(旧北界)の分布境界(金子之史(1996))



▲地理区と動物要素：ユーラシア大陸におけるヤチネズミ類、ビロートネズミ類の地理的分布。金子原『日本動物大百科』（平凡社）に一部加筆。

日本語の河川名(水名)の重層的形成とモンソーン・アジア最古基層(安部)

図25 世界における酒類の分類と分布

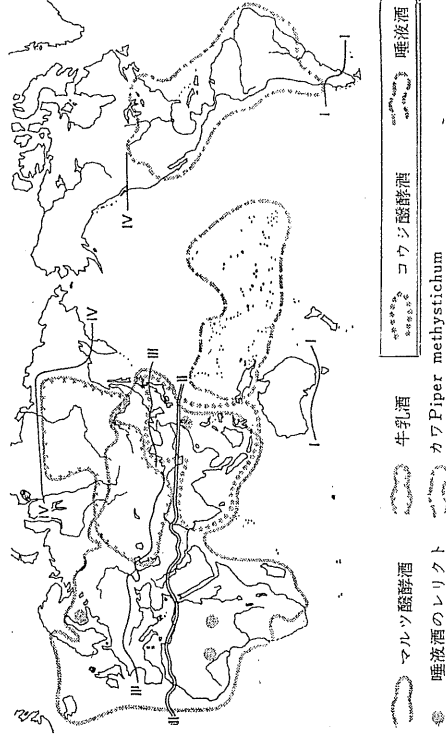


図 世界における酒類の分類と分布 マルツ醗酵酒の東亞における分布については
本文参照 (WERTH 1954) 森下正明・吉良竜夫 (1967)『自然・生態学的研究』
中央公論社

図 26 ナレズシ、小エビ塩辛ペースト、塩辛、魚醤油の分布



石毛直道 (1985)「塩辛・魚醤油・ナレズシ」
(石毛直道、ケネス・ランドル『論集 東アジアの食事文化』平凡社)

図 4 フラズシ、小エビ塩辛ペースト、塩辛、魚醬油の分布（破線は分布の不明確な地域および過去には存在したが、現在は消滅した場所を示す）

図 27-① モンスーン・アジアの主要作物分布 (根本・倉嶋・吉野・沼田 (1959))

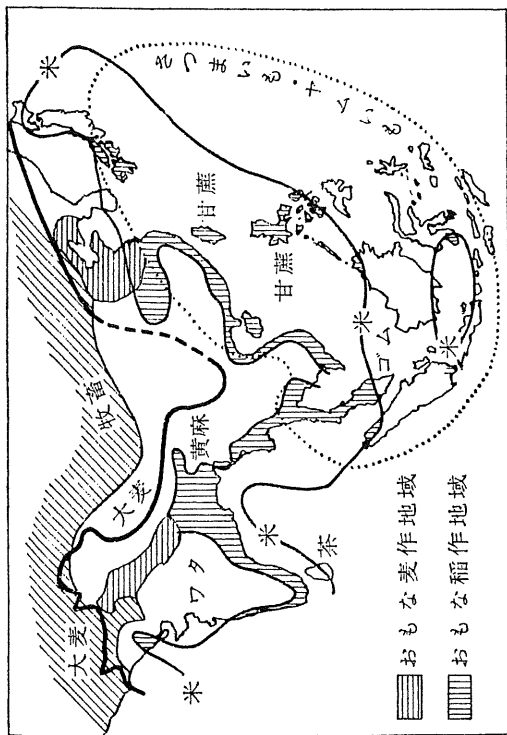
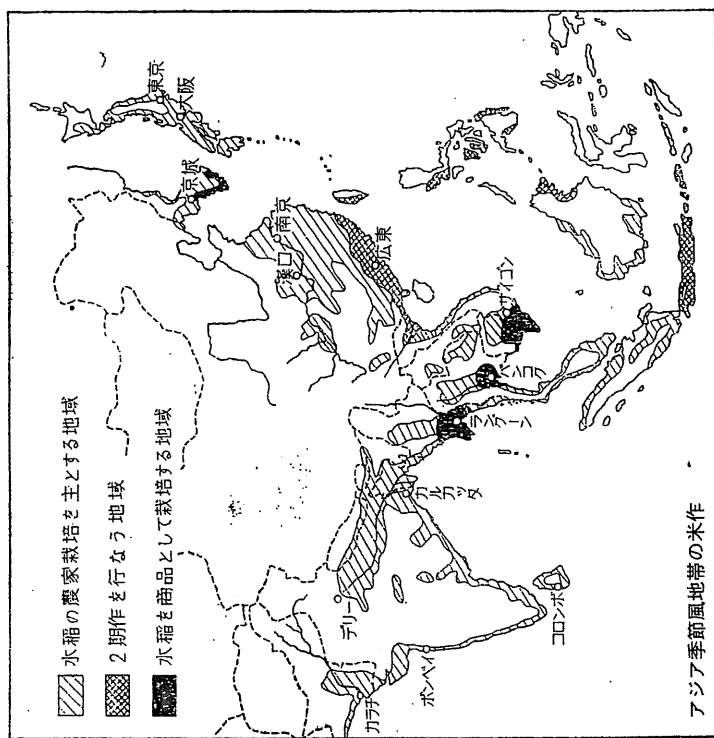
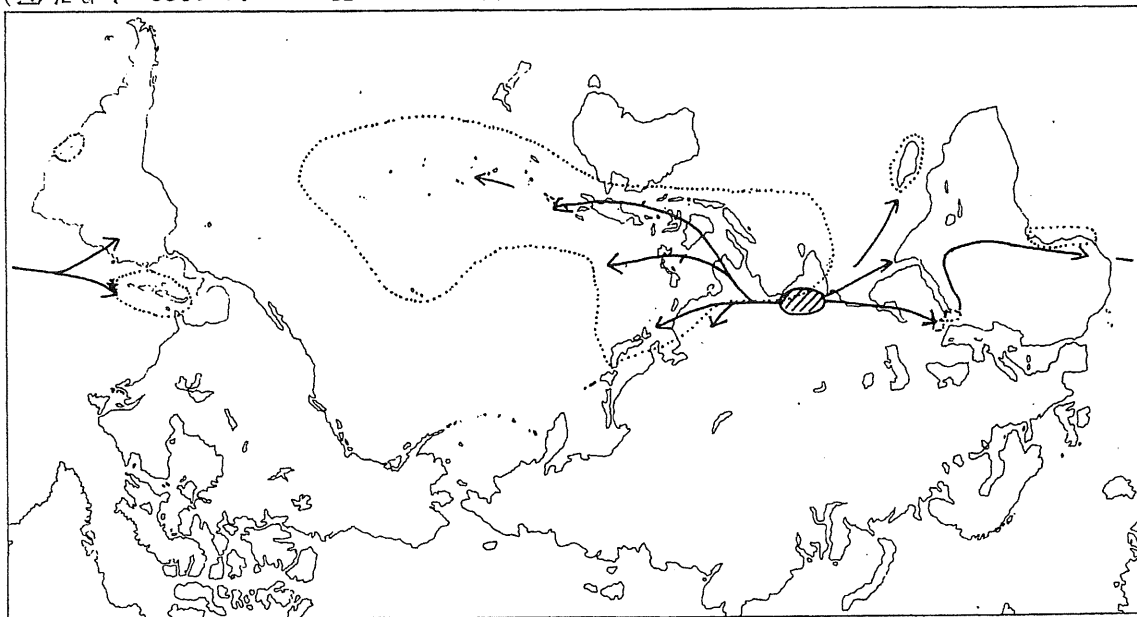


図 27-② モンスーン・アジアの米作 (根本・倉嶋・吉野・沼田 (1959))



アジア季節風地帯の米作

図 28-① さといち (*Colocasia esculenta*) の原産地と栽培地域 (高柳謙治 (1986))



(Plucknett, 1976; 星川、1978; Yamaguchi, 1983; より改写)

日本語の河川名 (水名) の重層的形成とモンスーン・アジア最古基層 (安部)

図 さといち (*Colocasia esculenta*) の原産地と栽培地域

図 28 ② サトイモ類の分布

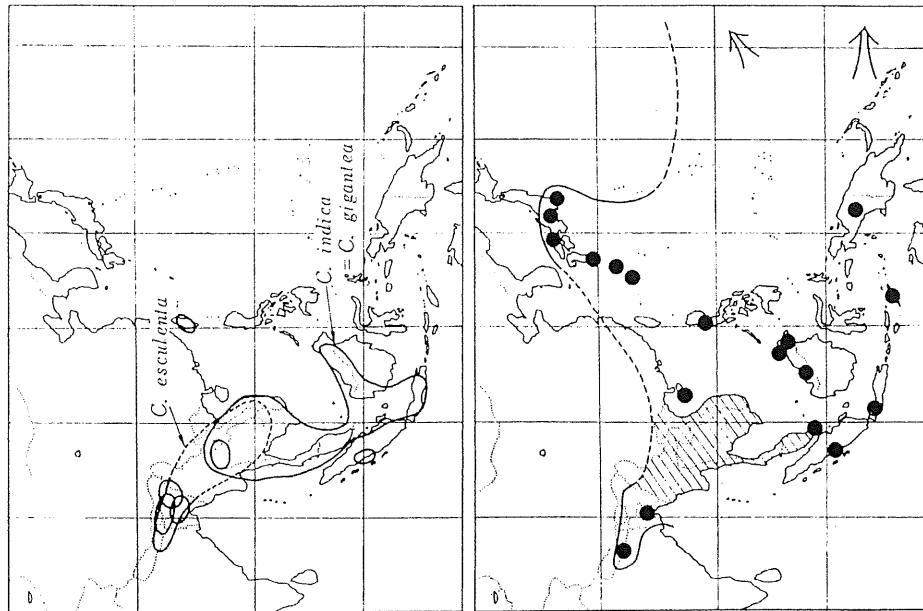


図 サトイモ類の分布

上 野生種の分布、インド東部からインドシナ半島に集中する。
 下 野生化した系統とミカシキ群の分布、ポリネシア東部まで広がる。
 斜線＝ふつうに分布する地域。
 ●＝斜線以外で分布が確認された地点（文書による記録は除外）。
 堀田満 (1983)「イモ型有用植物の起源と系統—東アジアを中心に—」(佐々木高明編『日本文化の原像を求めて』日本農耕文化の源流) 日本放送出版協会

図 29 ① ヤマノイモ類 2 種の栽培圏 実線はダイジョ、破線はナガイモ (堀田満 (1974))

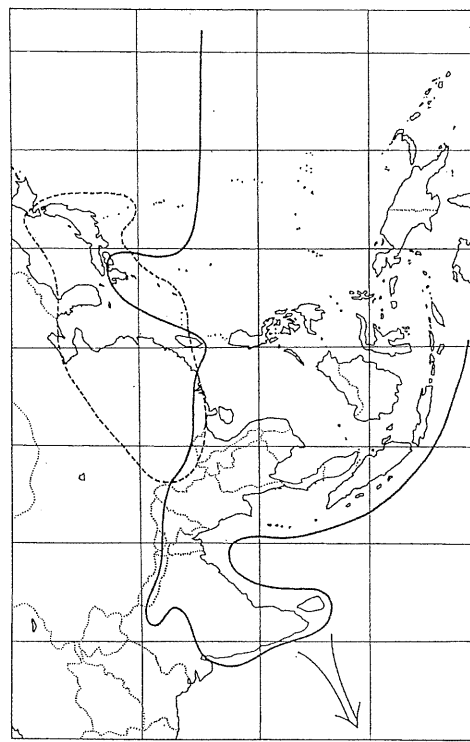
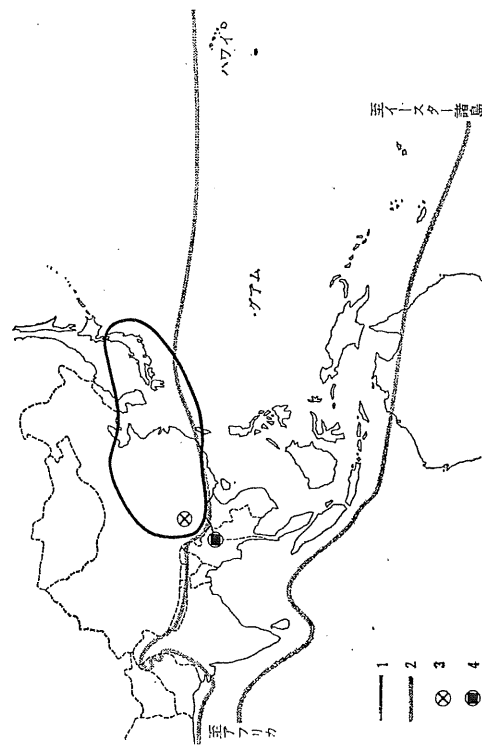


図 29 ② ヤムイモの熱帯種 *Dioscorea alata* と温帯種 *D. batatas* の分布 *D. alata* は熱帯ウヒ農耕文化の binding indicator である (BURKILL 1924 より一部改訂) 1 *D. batatas* ナガイモ 2 *D. alata* タイジョウ 3 *D. batatas* の発生地 4 *D. alata* の発生地



森下正明・吉良竜夫 (1967)『自然—生態学的研究』中央公論社

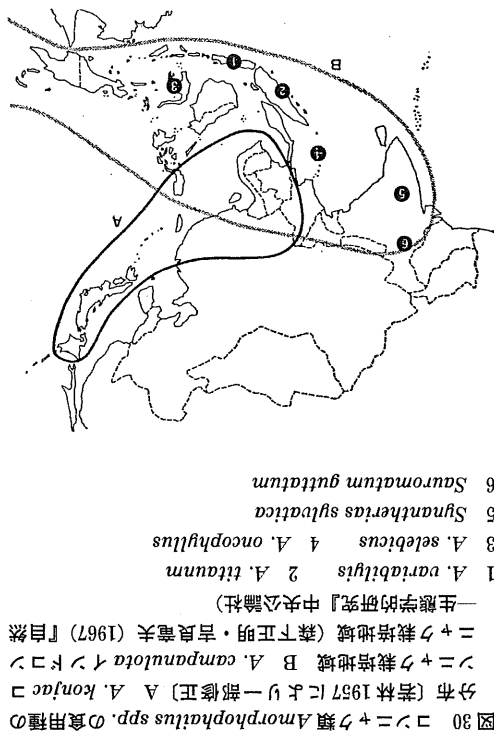


図31 イヌの食用圏 (鈴木秀夫 (1978) での作図)

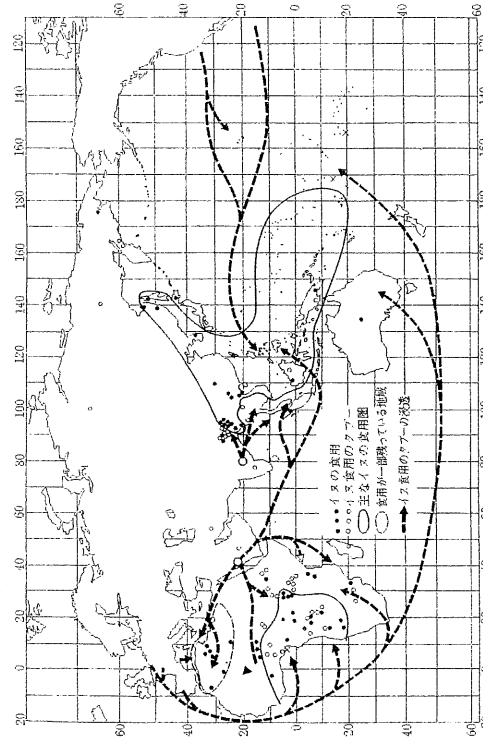
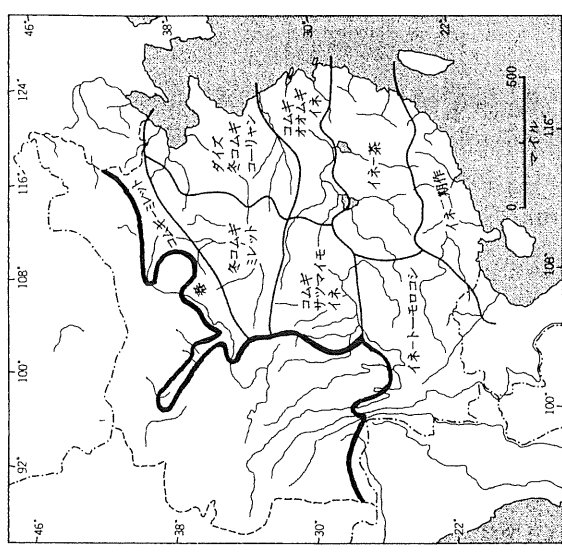


図 犬を食用とする習慣が (現在・過去に) あるアジア・太平洋地域 (鈴木秀夫 1978 の図49「イヌの食用圏」) (Simoons, Eat not this flesh, 1962 によって、鈴木秀夫 1978 で作図されたもの)

図32 中国の農耕領域



作物は重要度の順に挙げてある。バックの資料にもつぎスベンスカー作図 (Jecepr F. Spencer, 「Asia, East by South」, 1954 による) 大林太良 (1986) 「東アジアの文化領域論」

図33 日華区系の区分 (北村四郎 (1957) 「植物の分布」)

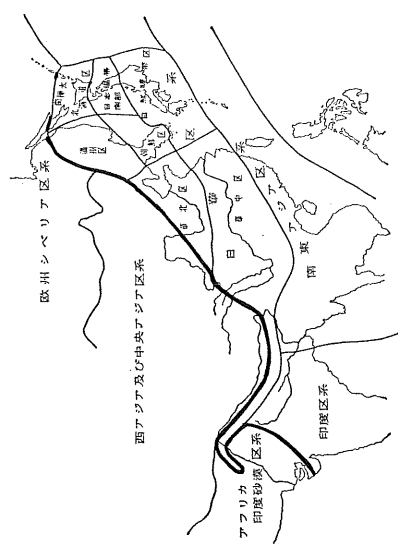


図 34-① トラの本来的生息地域 IUCN1996

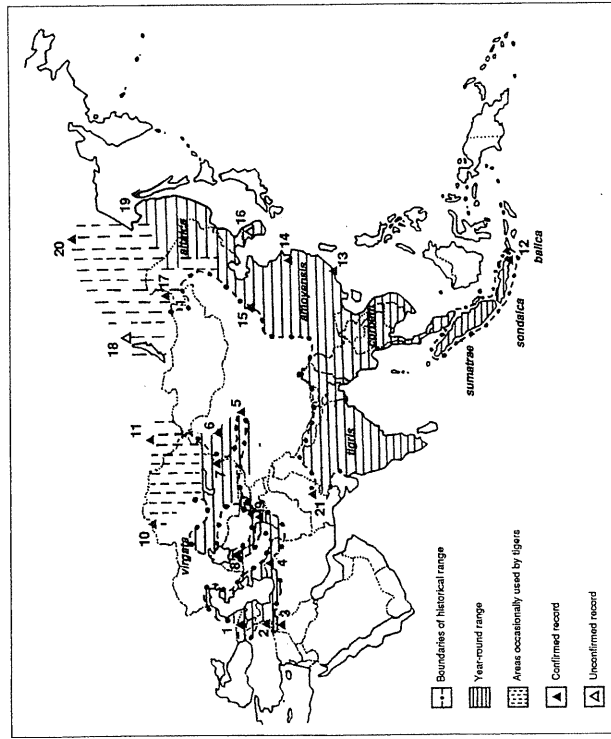
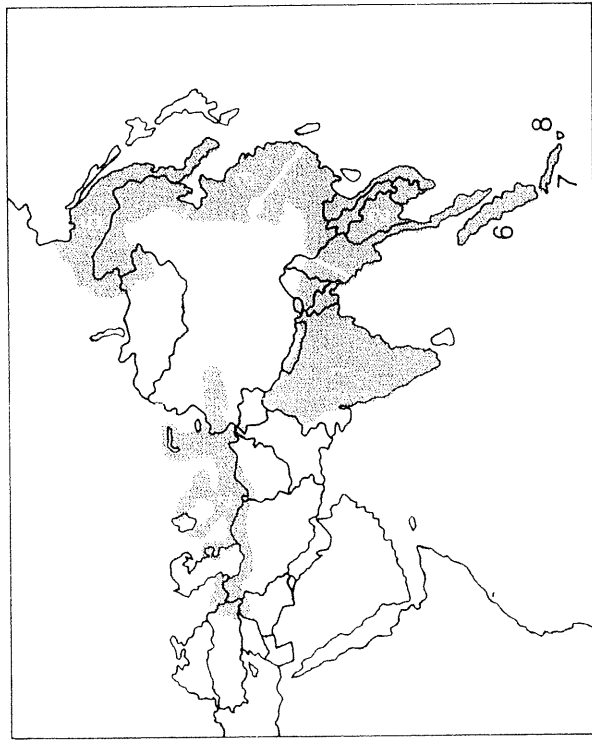


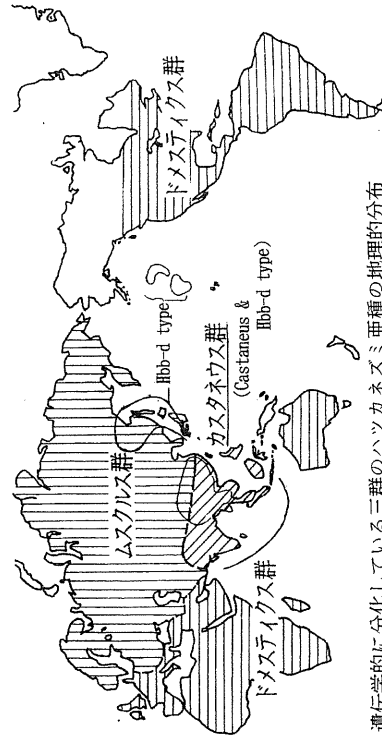
Figure 1. Historical distribution of the tiger (*P. tigris*); mid-1800s - mid-1900s (after Hephner and Studski 1972, Mazák 1979, 1981; Matjushkin et al. 1980, Ma 1986, Wang and Wang 1986, Lu 1987).

図 34-② 8亜種の本来のトラのタイプ (1~8 説明略) (メル・サンキスト (1986)「トラ」)



D. W. マクドナルド編 (1986)『動物大百科 第1巻 食肉類』平凡社 (監修・今泉吉典)

図 35-① ハツカネズミ (キャストネウス群) (Hbb-d 型を含む) の世界分布
森脇和郎・米川博通 (1993)【図 35-③の Hbb-d の領域も参照】



遺伝学的に分化している三群のハツカネズミ亜種の地理的分布

日本語の河川名（水名）の重層的形成とモンソーン・アジア最古基層（安部）

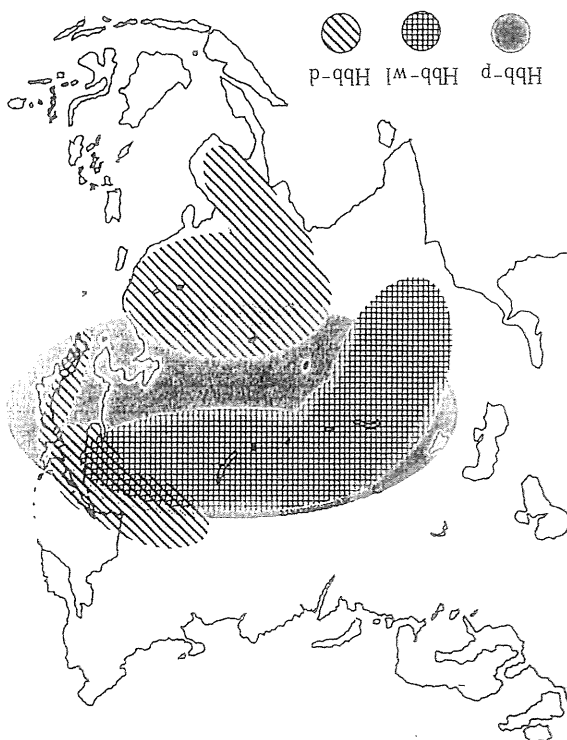


図 35-③ 東アジアにおけるヘモグロビンβ遺伝子多型の分布
（森脇和郎・米川博通（1993））【Hb-b-dの領域をHb-b-pが南北に分断】

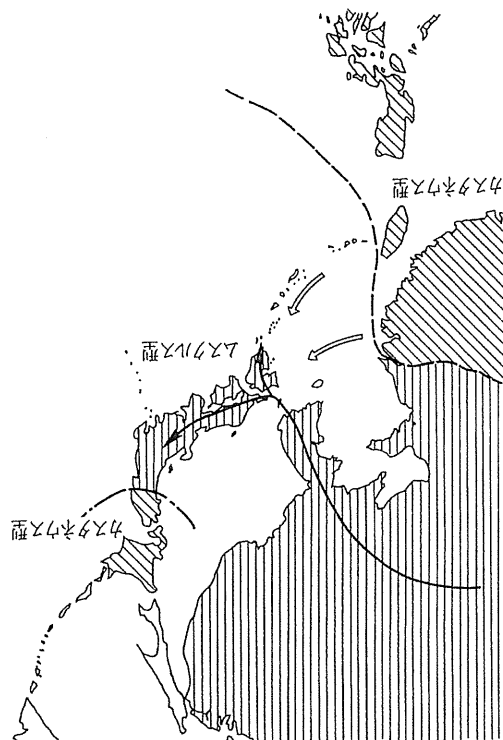
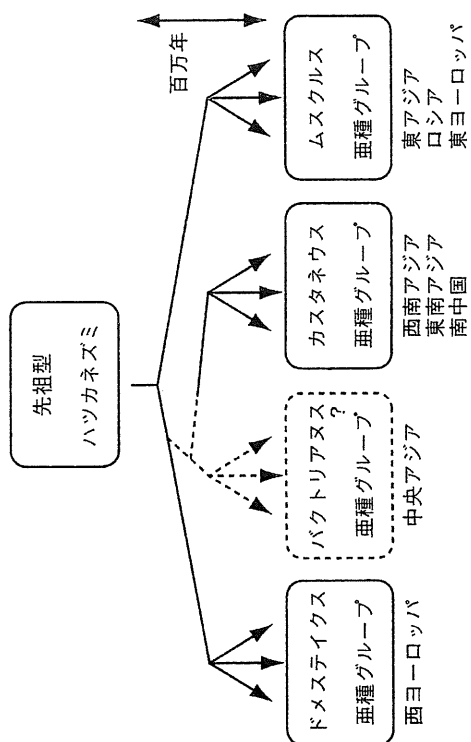
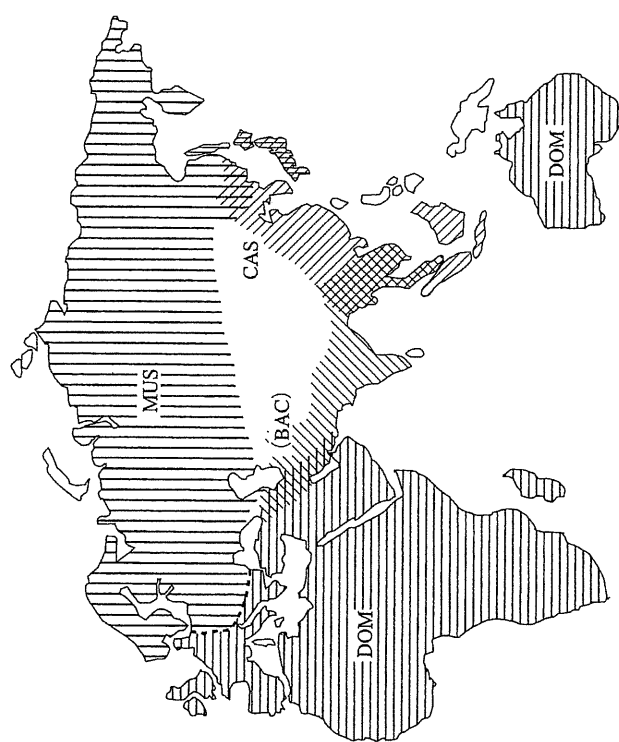


図 35-④ ミトコンドリアDNA多型からみたマウスの移動とヒトの移動
（森脇和郎・米川博通（1993））

図 35-② ハツカネズミ亜種グループの地理的分布（図 38 も参照）



DDM: ドメスティクス亜種グループ, (BAC): (バクトリアヌス亜種グループ)
CAS: カスタネウス亜種グループ, MUS: ムスクルス亜種グループ

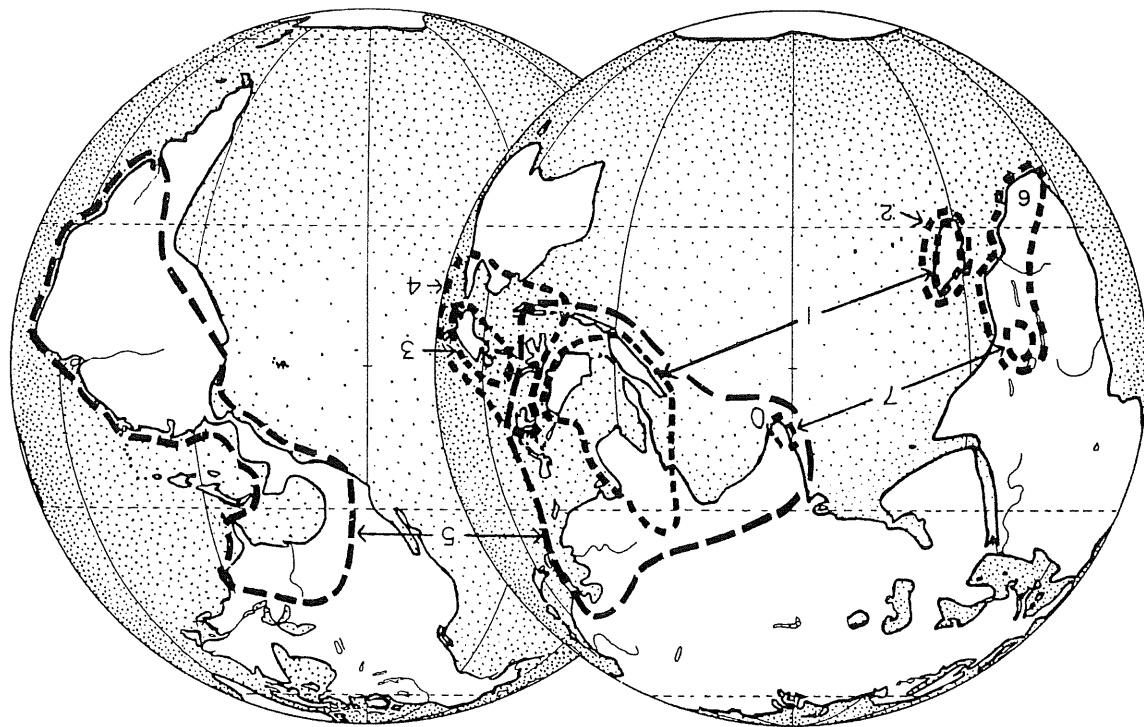


図 36 カエル (Brevicipitidae 族) の分布

Fig. 40. Distribution of frogs (toads) of the family Brevicipitidae: approximate limits of distribution of the seven subfamilies, numbered as in the list of families

図 37 クワ属植物の自然分布図 (村上昭雄 (1997) 「カイコの起源と絹の文化」)

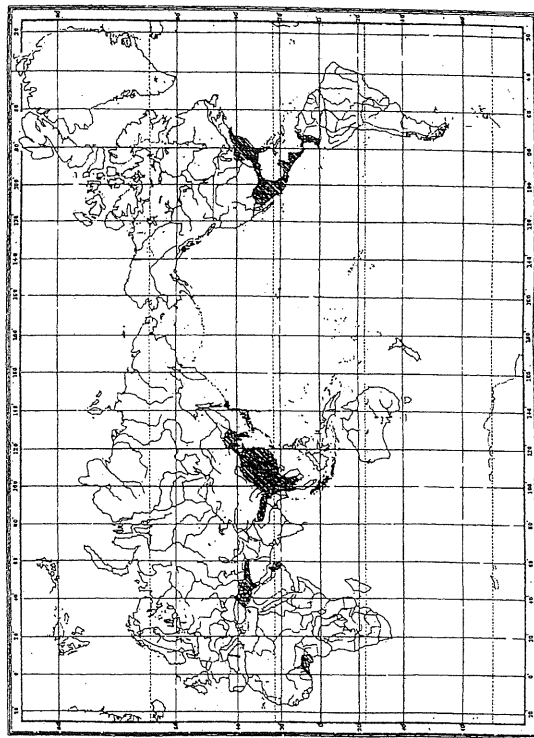
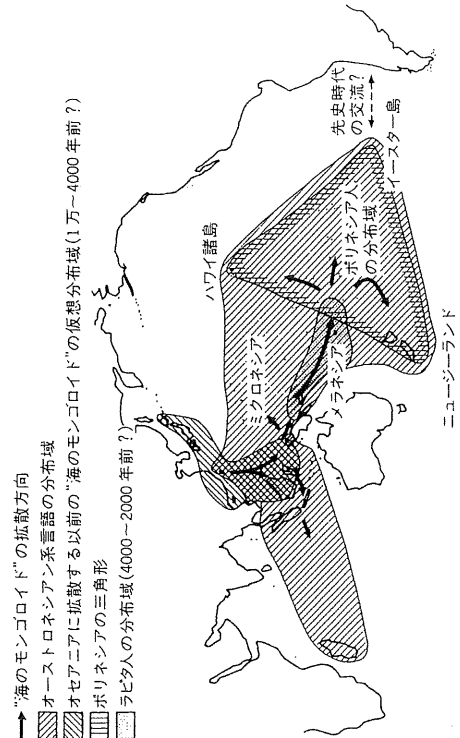


図 38 モンゴロイドのオセアニアへの拡散のシナリオ第 2 幕 (今から 6000~2000 年前ごろ) (片山一造 (1996))



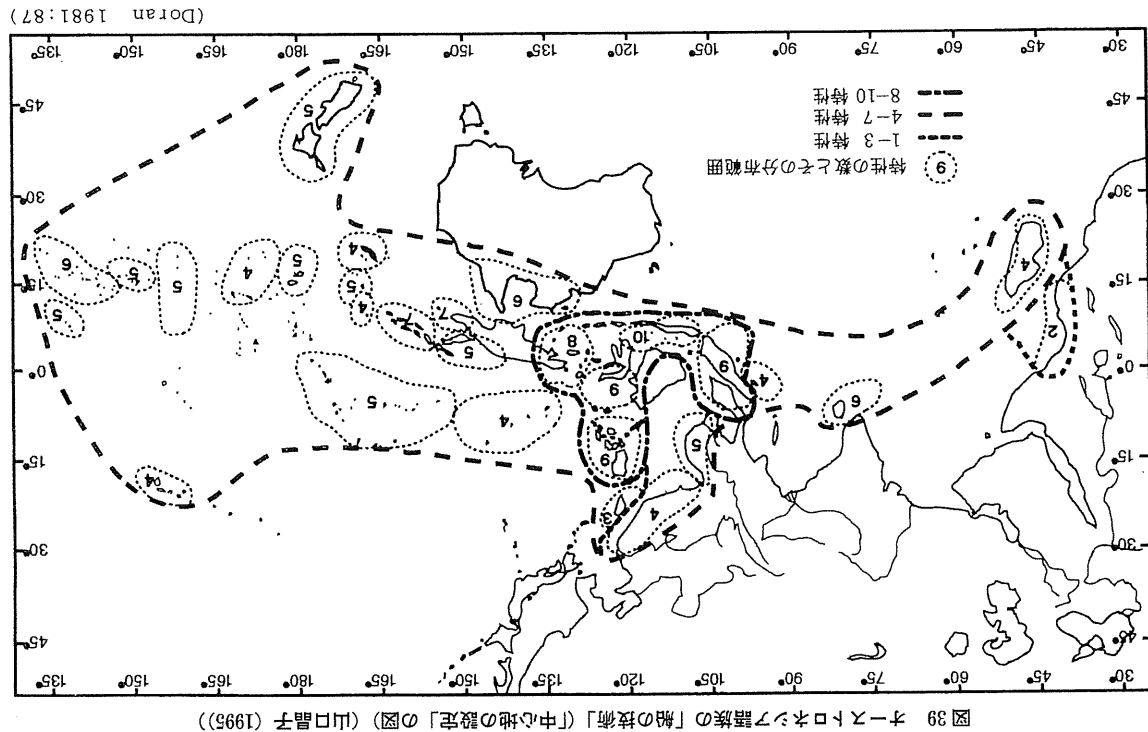


図 39 オーストロネシア語族の「船の技術」「中心地の設定」の図（山口晶子（1995））

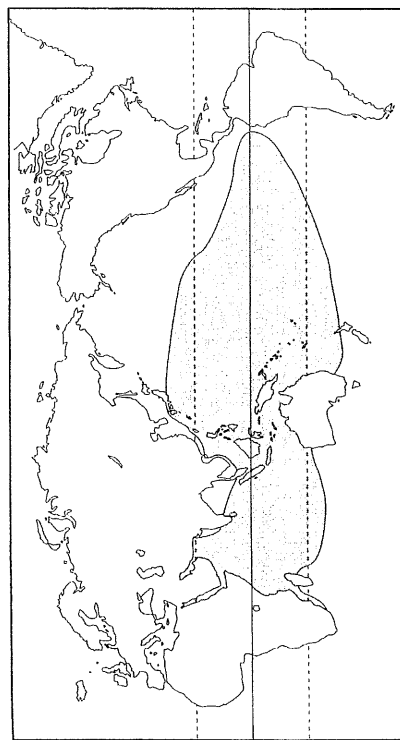
本図は、オーストロネシア語族の船の技術のうち、もっとも重要な12の特性を対象としている。

12 特性とは、船：筏船、フウトリッギー、ガーナー、シノグルフウトリッギー、ガーカヌー、グアルフウトリッギー、ガーカヌー、帆：グアルスアリッ、トセー、オセテニッ、スアリッ、トセー、クレー、スアリッ、トセー、フー、ス、コモ、スアリッ、トセー、その他：船尾間舵（クォーターター）、安定浮村

(Doran 1981:87)

その他：船尾側舵（クォーターラダー）、安定浮材

図 40 キイロダカラカイの分布図 白井祥平 (1997)



キイロダカラガイ分布図

【表1】大野晋氏による「言語と食糧起源神話の相応」年表（大野晋（1980）初出、2002版より）

		栽培植物	食糧起源神話	言語
縄文時代	早期 (B. C. 8000)	ヤムイモ	ウリコヒメ神話	4母音。母音終り。 単純な子音。 r, lの区別なし。 捲舌音なし。
	前期 (B. C. 6000)	ヒョウタンの栽培		
	中期 (B. C. 3500)			
	後記 (B. C. 2000)			
	晩期 (B. C. 1000)	ヒエ・アワの焼畑 農耕行われる。	アマノジャク殺害 の部分加わる。	
弥生時代	前期 (B. C. 300)	水田稲作北九州か ら広まる。	ウケモチノカミミ神 話に発展：イモ忘 れられる。	タミル語広まる。 母音調和なし。 農作の単語多くタミ ル語と共通。
	中期 (B. C. 100)	稲作東日本に広ま る。		
	後記			
古	墳 時 代 (A. D. 400)		ニギノミコト神 話(食糧起源と国 家起源の融合した 神話)	高句麗語系の言語、 朝鮮を通して九州畿 内に流入。

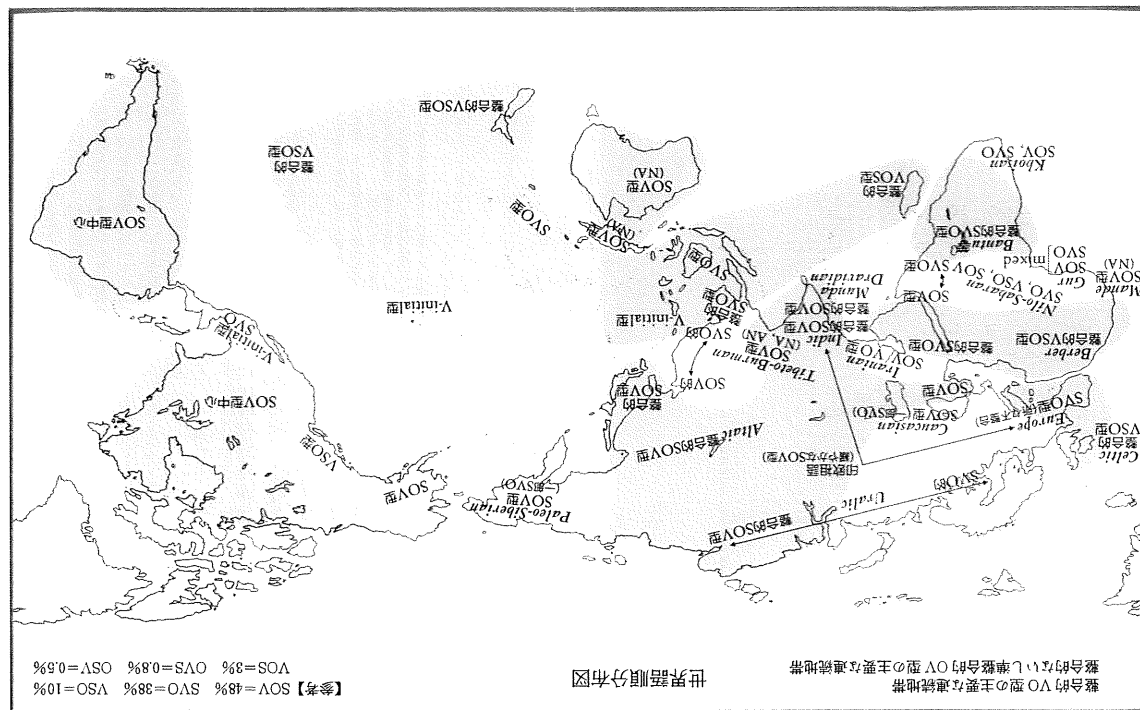


図 42 語順の特性の分布図 (Colin P. Masica (1976))

日本語の文法（語順）における北方言語との類型（OV, Adj.+N, etc.）

MAP 1. Word Order Feature Distributions

Object precedes Verb

(Note: this also implies Postpositions except where marked as follows:

Prepositions inside OV

Postpositions outside OV

Ambipositions, both Prepositions and Postpositions and other transitional phenomena, either inside or outside OV

----- Adj + N order dominant

— — — — — Celto-Romance area of mixed
N+Adj/Adj+N order, former
dominant

Genitive precedes Head Noun

..... Standard+Marker ("than")+

Exceptions: 1 Kashmiri 2 Khasi

3 Basque 4 Kanuri.

Note: certain cases of mixed phenomena, such as Burmese adjectives, Greek genitives and English genitives, are indicated by running the gloss through the middle of the speech-area concerned. Other, minor types of equivocation, such as position of pronoun objects, verb in German subordinate clauses, etc., are not indicated at all on this map. The highly equivocal word order of Hungarian is indicated by the special symbol ***** .

Anti-features:

ooooo Numeral follows Noun

+++++ Demonstrative follows Noun

x x x x x Qualifier follows Adjective

Fig. 42 The EURASIAN LINGUISTIC AREA
The language distribution is based on Carte xx of Meillet & Cohen
Les Langues du Monde (1952)
(THE SOUNDS OF LANGUAGE)

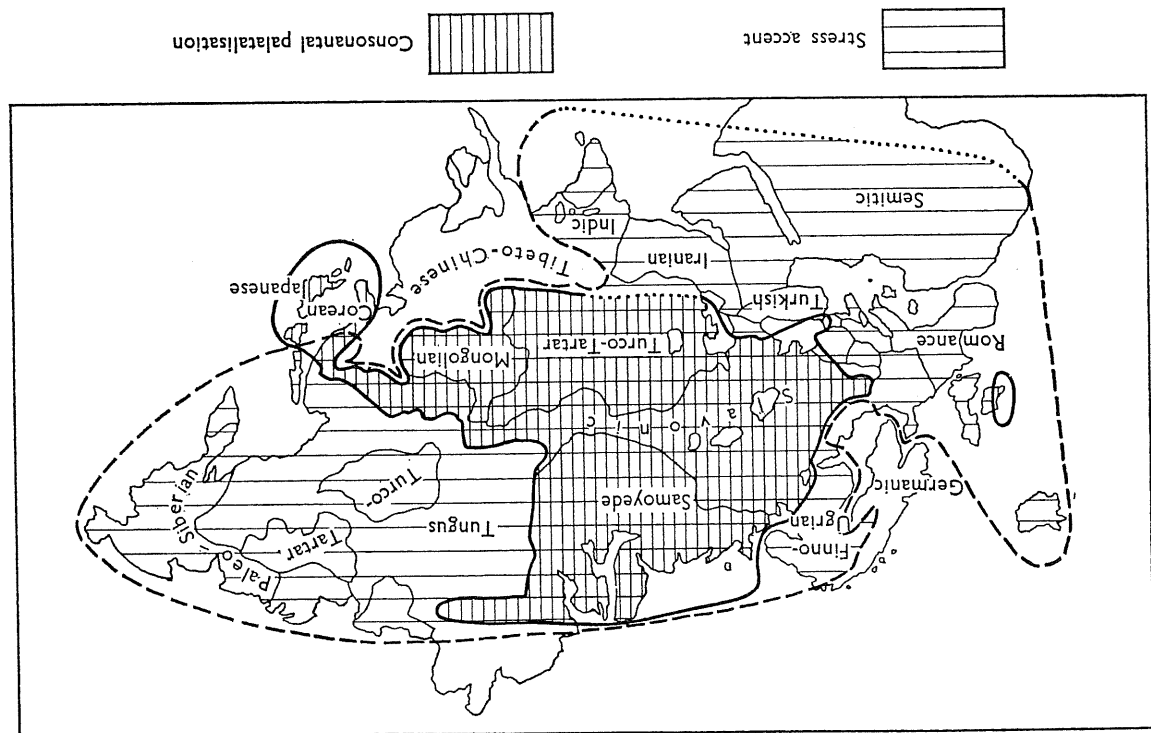


図 43 日本語の音系における北方言語との類型 (Consonantal Palatalisation)